

---

# 異世界に飛ばされたけど案外なんとかなるもんだ…

何かを探す人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

異世界に飛ばされたけど案外なんとかなるもんだ…

### 【Zコード】

Z2446BA

### 【作者名】

何かを探す人

### 【あらすじ】

主人公「黒羽蓮」は少女を助けてトラックに跳ね飛ばされたら森の中にいた。「いやおかしいだろ」これは主人公の「無視か?」異世界での旅をなぞつたものである。「おい!」「つるさい!」…「…すいません」「

偉大なる先人達に憧れて勢いで書いてしまいました・・・この小説には、主人公強キャラ、（多分）ハーレムなどが含まれています。また処女作なので話の展開や文章の中におかしいところがあるかと

思います。そういう物が大丈夫な方はどうぞお読みください。

## 第一話 異世界へ（前書き）

この小説は処女作です。

日本語、及び創作が苦手な作者なので、大変読みづらい文章となつております。

また、物語の展開がおかしいところもあるとおもいます。それでもよろしいかたは下へスクロールしていくください。

でははじめます

## 第一話 異世界へ

「・・・は？」

俺はどこにでもいる普通の高校生「黒羽蓮」だ。

高校から帰る途中、道路に転がって行つたボールを追いかけて道路に飛び出しあしまつた少女がいた。

その後ろからトラックが走ってきたのを見た俺は、

思わず少女に駆け寄り、少女を道路の脇に跳ね飛ばした。かなり強く押したから痛いとは思うがそれは道路に飛び出した自分の責任だと思つてもらいたい。

んで、少女を助けた俺だったが、少女を助けることばかり考えてそのあと自分がどうやってトラックをかわすのかを考えていなかつた・・・

「焦つてたとはいえるの俺あほすぎるだろ・・・

・・・ま、まあ少女が助けられたから後悔はしていないんだがな・・

「で、その後トラックにはねられたんだよな。

んで、跳ね飛ばされて地面に体がついたと思つたら森の中で立ち尽くす・・・

どつかで聞いたことのあるよつたな展開だなこれ

俺はよく主人公がファンタジーな異世界へ飛ばされて冒険するつていう小説を読むが、

そのときに異世界に飛ばされる理由がトラックに轢かれたからつていうのが多かった気がする・・・

「で、ここはどじだ？周囲は木に囲まれてる……なんだこのメモ」

・・・

「・・・なんとこいつテンプレ」

このメモによると、やつぱり俺は死んだらしい。  
まあテンプレだが原因は神の書類ミスのようだ。

んで、死なせてしまったお詫びとして異世界に転生させたようだが、  
どうやら元の俺の体はグシャツとなってしまって使えなかつたらし  
い。

なので神が直々に俺の体を作りなおしてそこへ俺の魂を入れて復活  
させたのが今の俺の状態らしい。

この紙には「その体ならばこの異世界で困ることはない  
しょ」 と書かれているんだが・・・

「正直こええぞ・・・いままで使つてきた体と違う体つてのは」

この体、神が作つたといつだけあつてかなりスペックが高い。  
試しに走つてみると、30分近く走つても全く息切れせず（元々1  
時間くらい走つても大丈夫）、  
ジャンプすれば5m以上跳ぶことができた（元の世界でもそれくら  
いは飛べた）

・・・あれ？ あんまり変わつてない？

「ま、まあそれでも少し变つてるから慣れていくとしてだ。 魔法が  
あるつてのは予想外だつたな・・・」

そうなのである。

この世界には魔法が存在して、戦いの道具として使われているらしい。

「……なんといつファンタジー。っていうか俺も魔法使えるんだらうつか

このメモには魔法の基本的な説明と、いくつかの魔法の詠唱が書いてあった。

このメモによると、この世界の魔法は、自分の内に存在する魔力・・・

・これをオドと呼ぶらしい。

をつかい、そのオドを詠唱によって練り上げ、それを魔法という形に変えていくというのが基本らしい。

また、魔力はオドだけではなく、大気の中にも存在しており、これをマナと呼ぶらしい。

上級者になると、自分の内からオドを発し、それをマナと混ぜ合わせて大規模な魔法を発動するそうだ。

魔法は属性と階級によって区別され、

属性は、火、水、氷、地、風、雷の基本六属性と光と闇の上級属性、そしてその他の特殊属性。

階級は、下級、中級、上級、特級、超級、最上級の六階級に分別で

きるらしい。

それ以外にも特殊な魔法として、精霊魔法や古代魔法など、普通の人では発動できない魔法も存在するらしい。

また、魔法はイメージさえできればどんなことも起こせると、オリジナルの魔法を作り出すこともできるらしい。

「ま、物は試しだ。やってみるか

これから試す魔法は（ウォータ）という水属性下級魔法で、対象の頭の上から水を落とす魔法らしい。

「よし・・・

来たれ水よ 敵に降り注げ ウォータ！」

詠唱を唱えると、自分の内からなにかが湧き上がってくるような感覚がした。

・・・多分これがオドだろう。そのオドが詠唱が進むにつれて自分から放出されて目標の上に集まり、

水となって、魔法名を唱えると落ちた。

「んー・・・出て行つた魔力が全て使われるってわけではないのか？」

出て行つた魔力が全て集中したわけではなく、体から放出されたあと、そのまま大気中に拡散していった魔力も存在した。

「まあ練習すりやそういつた魔力も制御できるようになるだろ。とりあえずいまは他の魔法の効果を見てみるかな」

俺はメモに書かれている全ての魔法を発動してみることにした。

・・・

「ふいーおわつたー」

魔法といつものに初めて触れたせいか、ついつい練習に没頭してしまった。

「ま、とりあえずこれでメモに書かれた魔法は全て発動できたか

メモに書かれていたのは

(ウォータ)	水属性下級魔法
(スプラッシュユブレッド)	水属性中級魔法
(ファイア)	火属性下級魔法
(メルトストーン)	火属性中級魔法
(フリーズ)	氷属性下級魔法
(グレイブ)	地属性下級魔法
(ウインド)	風属性下級魔法
(ウインドヒール)	風属性中級魔法
(ボルトショック)	雷属性下級魔法
(プラズマソード)	雷属性下級魔法
(チック)	無属性下級魔法

の11個だった。

一応全部発動することはできたが、制御が甘く、なかなか思つた通り発動できなかつた。

また魔法によつては一度では成功せず、なんども唱えてやつと発動できたものもあつた

しつかり発動したのはイメージしやすかつたプラズマソードだけで、魔法を使うにはイメージが大切だということが理解できた。

「特にメルトストーンを発動した時はヤバかった・・・まさか溶岩が噴き出るとは

あのときはやばかった・・・

地面がいきなり茹つて溶岩が噴出し流れていったのにはビックリした  
とつさにウォータの魔法を使って出てきた溶岩を全て固めたからよ  
かつたものを

あのまま流れっぱなしだつたらこじら辺一帯が原因不明の大火災になつていたことだろ？。

「まあそこじら辺は要練習。とりあえず眠い・・・もつ夜だし

メルトストーンを使ったときの後始末で精神的にかなり疲れた・・・まあそのおかげで魔法の危険性と便利さをよく理解することができたが。

「とりあえず今日は寝て明日ここを出るか・・・

溶岩を追いかけていつたらちゅうどく街道もみつかったところだし

まあ街道といつても草原にそこだけ草が生えていないつてかんじの道だがな

「枝を集めてつと・・・よし、これくらいでいいか。

燃え上がるは 炎なり ファイアつと

枝を集めてファイアの魔法で火をつけ、たきびを作った。

「あつちの常識が通用するかはわからんねーけど動物は火を怖がるもんだからな

森の中にはあつた果物（チョックで鑑定済み、リンゴみたいなものを夕飯代わりに食べて、

俺は明日に備えて寝ることにした。

「ふう・・・しかしあつちで生きてたときこは野ざらしで寝るなんて考えらえなかつたな・・・」

幸い地面にはやわらかい草が生えており、寝るだけでもいいだ。

「まあどうでもここも……色々あって疲れた……おやすみ」

俺はすぐ寝付いた……

## 第一話 異世界へ（後書き）

黒「さて作者……」

はい・・・

黒「なんだこの見ついちらくなおかつ無茶苦茶な文章はー！」

いや、ほんとすしません。

他の人の小説をみて自分も書いてみたいなーとおもって書き始めたらいまあここれがむずかしい

黒「んなこと自分の文章力のなさから考えればわかる」とだらう。  
・・・

し、しかたないじゃないかー書きたかったんだから・・・

黒「はあー・・・まあこれから頑張つて上手くするにはあるんだろ  
う?」

うん、こんな文章じゃ見てもひつひつ価値がないからね

黒「んじゃ頑張つてはやくつまくなつてくれよ?」

はい。

それではまだ主人公のキャラ設定もあやふやなこの小説ですが  
よろしくおねがいします。

黒「・・・えー」

1月7日 最初の部分を少し編集しました

## 第一話 戦い（前書き）

さて、一話目です。

あいも変わらない駄田文章ですがよろしくおねがいします。

でははじめます。

## 第一話 戦い

「あさかー・・・ねみい」

一夜たつて、起きた俺を迎えたのはそれは眩しい朝日だった。

「さて、一晩ぐつすり寝て体力も魔力もすっかりかいふくしたし、そりそりここを離れるとするか」

どうやら魔力は体力と同じく休憩すれば回復するようで、特に寝れば大きく回復するようだ。

「さて、どうちに行くとするかなー」

昨日確認しておいた森からほど近いところにあつた街道は、右に向かえば平原に続く道をなだらかにくだつていき、左に向かえば登り道で、その先には山があった。

「・・・」には右だな。好き好んで山に行きたくはないし

といつわけで俺は右へ進んでいくことにした。

・・・

「しかし・・・きれいに平原しかないなこの道」

歩いて行く道の先に広がるのは雄大な草原。

元の世界では考えられないほど広大だ。

「まあ街道があるってことはとりあえずここにあるこていけばいざ  
れは町に着くんだろうが……」

見渡す限りの草原。モンスターが出るかもしれない、という危険も  
ついつい忘れそうになるほど  
障害物がなく、広い。

「……ん？」

のほほんとゆっくりある「」でいた俺の耳に音が入ってきた。

「これは……人の声!? しかも悲鳴混じりだし……ちつ！」

俺はその音が聞こえた方向に向かって走つて行つた。

・・・

「……なんだよ……」  
「れ」

たどり着いた場所でみたものは・・・

賊と思わしき人が20人ほどで鎧を着けた人3人をいたぶつていた。

「くそ……ビーなつてんだこれ……俺はどうすればいいんだよ  
・・・」

賊に加わるのは問題外。

かといって騎士に加勢して賊を倒すのも無理が・・・

「くそつ……あつ、おい! 大丈夫か! ?」

賊たちと騎士たちが戦っている場所から少し離れた場所に騎士の仲間と思わしき人が倒れていた。

「おー、じっかりしるー。」

「・・・ぐ、ひひー。」

「目が覚めたか。待つてろ、今すぐ治癒魔法を・・・  
癒しの風よ 傷つきし者を包み込みて 争いの傷を消さん!  
ウインンドヒール!」

「う・・・ぐ」

「な、なんでだ!なんで効かねえ!?!?」

「ぐ・・・無駄だ少年よ・・・私の傷はひどく遅れのようだ」

「そんなことねえ! うー一度・・・」

「私の、ぐ、ことはいい・・・それよりも少年よ・・・ぐ  
ひとつ頼まれてくれんか・・・」

「あーなんだ?おれにできるひとならなんでもしてやるー。」

「賊が私たちを襲つたのは、ぐ、私たちの身なりをみて、  
金になるものがあると見たからだらう・・・」

「頼む少年よ・・・財宝はどうでもいい・・・ただおのの方だけは、  
あのお方だけは賊の手に渡さないでくれ・・・」

「ああ！絶対に渡さねえ！そのおの方つてこののはじりこるんだ！」

「ありが……とづ……あのお方は、馬車の中に…………」

「

「おい！？おい、おっさん一起きりおっさん！」

「頼んだぞ……少……年……よ……」

「おっさん……？……へやつ……」

俺は田の前で死にかけている人一人救えねえのかよ！

「……心配すんなよおっさん、ぜつてえにそのお方つてこのは  
救つてやる」

「自分が死にかけてるつていう状態でその人のことを心配するほど  
おっさんにとって大切な人なんだろう」

「ならぜつてえにその人は助ける！それがおっさんを救えなかつた  
ひとくの罪滅ぼしだ！」

おっさんが死んだときに他の騎士も倒されてしまつたらしい。

賊たちは馬車についている美しい宝石や装飾品に夢中になつていていた。

「……不思議だな……わっせと同じく、  
いやわっせ以上に不利な状況なのに、全く怖くねえ……」

どうやら、俺は思ったよりもおっさんを目の前で死なせたことには  
らをたてているらしい。

「・・・覚悟しろよ賊たち。俺の覚悟は決まつたぜ?  
雷は敵を切り裂く剣とならん プラズマソード」

覚悟は決まつた。武器もある。あとは戦うだけだ・・・

「・・・不動黒羽流 黒羽蓮! 参る!」

・・・

「・・・ふつ」

賊に向かつて駆けだした俺はまず近くにいた賊を斬る。

「な、なんだてめえ・・・ぎゃあつ!」

・・・1人

「はつ」

「ぐわあつ」

2人

「次!」

2人斬つた後、その近くにいた6人の賊へ駆け寄る。

「な、なんだこいつ！おい！まだ一人いたぞ！」

賊たちに気づかれ全員が俺の方に寄つてくる。

「だが……遅いつ！」

「やああいつ！」

「ぐわッ！」

一閃の内に3人の賊を叩き伏せ、返す刃で残りの3人を切り捨てる。

「お、お前よくもやつたな！お前ら、かかれーーー！」

「　　「　　「　　！」　　」

8人の仲間がやられたのを見て、賊の頭と思わしき人物が他の仲間に指示を出す。

その指示を聞いて残りの11人もの賊が俺に向かつてくる。

・・・だが、それは俺の狙い通り。

俺がこの戦いで負ける条件は誰かに動きを止められる」と。  
だれかを犠牲にして他の仲間で俺を倒すなんていう作戦をとられた  
らやばかったんだが・・・  
どうやら杞憂に終わつたらしい。

たとえ人数が多くても一方向から一斉にむかつてくるならば・・・！

「不動黒羽流遠攻術亞流！ 斬空刃・雷！」

「……………」

・・・こうやつてプラズマソードに魔力を大量に込めて放てば、巨大な雷の刃を放つことで11人くらいなら倒すことができる。

「な、なにもんだてめえ・・・俺の仲間をこの一瞬で全員倒すだと・・・!?

「・・・賊に名乗る名は無い」

କାହାର କାହାର କାହାର କାହାର -

やけになつたのか頭は剣を抜き、一ひらへ走つてくる。

終わりだ  
・・・不動黒羽流  
絶牙上

— ४७५ —

ハタツ

・・・プラズマソードで突き殺した頭が倒れる。

ふう・・・終わったか・・・人・・・殺してしまったな・・・」

「今はそれに感謝しておいた・・・だが、殺した」とは忘れない。

たとえそれが賊であってもだ・・・

人を殺した事を忘れ人を殺すことに慣れてしまつたらおわりだ。

「・・・そうだ、おっさんに頼まれた・・・」

賊を殺したことで忘れそうになつていていたが、

そもそもの目的はあのお方とやらをたすけることだったな・・・

「えつと、馬車の中だけ・・・」

馬車に飛び乗り、幕を開けて中の様子を見る。

そこで俺が見たものは・・・

「・・・（ブルブル）」

・・・ブルブルと震える金色の髪が美しいかわいい少女だった。

## 第二話 戦い（後書き）

ふふつ！「不動黒羽流 黒羽蓮！ 参る！」だつてさー（笑）

いやー しかしまさか剣術使いの主人公とは

黒一思つてながつたんかい！」

うん、途中で演出どうしようかって劍術入れればかっこよくねと思つたのが

入れた理由

黒「しかも理由がかっこいいからって・・・」

まあいいじゃないか。

黒「俺がするのかよ・・・

えつと、俺が使う不動黒羽流は、俺の家に代々伝わる剣術で、発祥は室町時代だそうです。

1体多を基本とした剣術で、

イメージとしてはるる剣の飛天御剣流がいいかと。

北川の北川の北川

黒「・・・あんたが考えたんだろうが」

いやまあそうだけどね、ついでに今回出た技もよろしく

黒「あいよ、

まず一つ目の技（斬空刃・雷）は、  
不動黒羽流 斬空刃を魔法型にアレンジしたもので、  
自分の魔力を雷属性に変換して、剣にまとわせて刃状に放つ技  
で、  
通常の斬空刃と比べると、かなり殺傷力が高い技になっています  
また今回のこの技は、大量の魔力を込めたため大きくなつてお  
り、

20人くらいまでなら同時に倒せる大きさになつっていました

あれ？でも殺傷力なら風属性のほうが高かつたよね。  
こうスパッと斬れて

黒「まあそりなんだがな、今回は剣がプラズマソードだつたから雷  
属性の

斬空刃にした。それに今の俺ではまだ普通の剣では斬空刃はう  
てないし」

ふむふむ・・・今回斬空刃を打てたのは剣がプラズマソードで  
元から雷属性になつていて、

さらに自分の魔力でできた剣だから魔力が通しやすかつたからうて  
たと。

黒「そういうこと。

で、もう片方の技、絶牙だけど、

あれは単純に走ってきた賊に向かつて全力で突きをくらわせる

・・・ 終わりだとか言つておいて結構単純な技だねそれ

黒「だけど早くタイミングが早ければ外れるし、

遅ければ先に相手に斬られるから結構難しいんだぜ？」

その分決まれば相手の勢いがそのまま威力になるから  
ほぼ確実にたおせるんだがな」

なるほど・・・ 単純ゆえに難しいと

黒「まあそういうこと。

解説は以上でいいか？」

OK・ありがとねー

では、説明ばかりで長くなりましたがこれで終わります。  
これからもよろしくお願ひします。

## 第二話 出会いと始まり（前書き）

この小説は思い立ったときに書いています。  
なので今日みたいに一気に登校する時もあれば、  
登校しない日もあるとおもいます。  
そこを了承してお読みください。

では、第二話 出会いと始まり スタートです

「・・・（ブルブル）」

……さて、どうすればいいのだろう。

黒車の中には恐らくは恐怖に震えている少女がいた。

思ひ立てる少女がおひわんか言ひてしたあのの方だと思はんたか。

「あ、あのー？」

「つつつつつつ！（ガタツ）」

・・・「これである。

さきほどからなんとか意志の疎通を図ろうと話しかけているのであるが、

賊たちも全部倒したからこの少女が怖がる理由がイマイチ見えてこないんだが・・・

「・・・あ、あなたは・・・」

ん？ なんだ？」

「ひやー？」

「・・・（汗）」

・・・あつから話しかけてられてんのに返事したら怖がられるつて；

・・・次話しかけられたら全部言い終わるまで返事しないことです

るか

「・・・あ、あなたは・・・」

「あなたは私を殺すんですか？」

「・・・は？」

・・・わて、どう反応すればいいのだろう。

まずなぜその結論に少女が至ったのかを少女の見方で考えよ。

・・・馬車で進む 突然賊に襲われる 馬車の中に籠る この馬車  
は外が見えないようになつてている

喧騒がやむ 僕が中に入つてくる 僕がだれかはわからない  
普通に考えると賊の仲間・・・

・・・なるほど

「・・・君は俺が君たちを襲つた賊の仲間だと思つてゐるわけかい  
？」

「・・・（口クン）」

「あー……そうこうつか」

確かにこの状況ならそう思つてもしかたないよな・・・

「あーっとな・・・俺は君の護衛の騎士たちに君たちを襲つた賊から君を守るよ」

頼まれて賊たちを倒して君を助けに来た。

で、賊は全て倒したんだけど・・・証拠のためにも見るかい？」

「・・・はい」

・・・

「・・・」

「・・・」

改めてみると悲惨な光景だな・・・

賊と騎士を合わせて24人が死んでしまった・・・

・・・この子だけでも守れたと思うべきか。

それとも俺の判断が遅くて守れた命を失わせてしまったと思うべきか・・・

「・・・君を守っていた騎士たちは最後まで君を賊から守りつと戦つていたよ」

「・・・そうですか」

・・・こうつたときこの気ついたことが言えないこの身が疎ましい。

「……私を助けて下つてありがとうございました」

「……礼はいらなこよ。俺は騎士たちを守る」とができませんで  
した」

「それでも……私を助けてくださいとに変わりはありませんで  
んから」

「……そつか

「……」の子は強いな。

普通なら人の死を見れば田を反らしたくなるものなのにじつと自分  
の騎士たちを見つめている。

「……それで、頼はざつするんだい？」

「……」から一番近い町に向かいたいと思います。  
もともとそこに向かつ予定でしたし

「……ならさ、俺を護衛に雇つてくれないか？」

「え？」

「実は俺が、この地に来たばかりでこの辺の地理とか全くわからんね  
一んだ。

だから君を守る代わりにこの辺のことを教えてほし」

「教えるのはかまいませんが……そこは結構遠いですよ？」

「かまわない。どっちにしろ俺は街に行きたかったんだ。  
護衛くらいで道案内してくれるなら安いもんさ」

「ですが……」

ん？

「失礼ですがどのようにたかうんですか？」  
武器も持つてないようですし」

「あー・・・んとな、  
雷は敵を切り裂く剣とならん プラズマソードと、これでいい  
いか?」

「え？ あなた魔道士だつたんですか？」

「魔道士・・・つつーのが魔法を使う人を指すのなら確かに俺は魔道士だな」

「そうなんですか・・・魔道士ならば充分な力ですね。  
では護衛よろしくお願ひします」

「ねこねこ。」

こうして俺は助けた少女と一緒に行動することになった。

•  
•  
•

少女と一緒に歩き始めて数分のこと

・・・僕もすこ・・・非常に力をもすこ・・・」の少女と話す「どがねえ!

ひょっとしてこれが「さくら」と無言? それは「くまもと」……あ

「せういや俺達名前交換してねえな」

「あ、そうですね」

「しばらぐの間一緒に行動するんだ。名前教えておくよ。俺の名前は黒羽蓮だ。よろしくな

「クロハ・レンですか?」

「あー・・・蓮がファーストネームで黒羽がファミリーネームだから、  
レン・クロハなのかな?」

「レン・・・ですか。ではレンさんと呼びますね」

「それでいいよ。で、君の名前は?」

「はい、私の名前はミリシア、「ミリア・スペルテナ・テレジアス・  
フォン・フェレルシア」です」

「・・・なつがい名前。ていうかどつかのお姫様みたいな名前だな  
(笑)」

「? そうですよ?」

「・・・はい?」

「・・・えつと、私の事知りませんか？」

「ああ

「・・・えつとですね、私は「フェレルシア王国」の第三王女です」

「・・・なに――――――！」

「ひやうー？」

「バカな！？ありえん！？」

「あり得ないとか言われても事実なんですがー？」（泣）

まずいまずいまずいってー？確かにいい身なりしてるけど異世界なら貴族くらいありえるだろうしどつかの貴族の『令嬢かとは思つたけどまさか王族とは思つてなかつた！？

「まずいって・・・」

俺がこの世界に来て決めた」とのひとつ「王族には関わらない」がこんなにも早くやぶれるとはー！？

え？なんで王族と関わらないのかつて？

王族に関わると口クなことになりはしないってわかるからに決まつてんだろーが！

俺は静かにくらしたいんだよ・・・（泣）「あ、あのー？」

「なんだよー?」

「ひやーひーへ。」

「あ、悪い……不測の事態で混乱してつい怒鳴っちゃった。許してくれ」

「いや、それはここんですか……  
なにか私悪いことしましたか?」

「いや、君に悪いことはないよ。君が王女だとこののが問題なんだ」

「?私が王女だとどんな問題が?」

「あー……んとな、俺はあんまし田立つのが得意じゃないんだ  
で、君が王女だと君を屈げるとき田立つかもしれないだろ?  
それが嫌なんだ……」

「やつなんですか……」

「……嘘はつけないだ?」

「届けた時に只に囲まれたりするかもしれんからな

「え?と……じゃあ護衛につこうともやめにやつこましゅ

「つか?」

「……それも困るんだよな。」  
「で護衛から離れるとせつからずの街  
への案内がなくなつてしまふ。」

「ふー……じゃ、やつしてくれ。俺はこのまま君の護衛を続ける。」

で、君が向かう街の入り口についたら君を兵に預けて別れる。それでおしまい。

それでいいかい？

「……わかりました。それでいいですよ」

「よし、んじゃ進むか。つていつか俺敬語じゃないけど大丈夫か？不敬罪で捕まえたりとかしないよな？もしそつながら敬語にするが」

「つかまえませんからそのままのままの話し方でいいですよー？」

「おーよかつたよかつた。いきなりつかまつたうどひつかと思つた・・・」

「・・・私そんな話し方ひとつで捕まえるような人に見えます？」

「いや、わからん。まだ出会つたばっかだしな」

「・・・そういえばそうですね、まだ出会つて30分くらいしかたつてないんですね・・・」

「ふむ、俺が敬語じゃなくていいなら君も敬語じゃなくていいぞ？」

「いえ、私はこれが普通の話し方なので」

「へー・・・」

などとそんなことを話しつつ、俺とミコアの一人旅（旅なのか？）が始まった。

## 第三話 出会いと始まり（後書き）

黒「やつと街に進み始めたのか・・・」  
だねえ・・・実は主人公、復活したところからそんなに動いてなかつたり

黒「作者の力不足だらうが」

グハツ！！！ サベシャに 500ポイントのダメージ

黒「なんだこのテロップ・・・」

? 「・・・大丈夫ですか？ 作者さん」

おお・・・ミリアは優しいな・・・ビニジの主人公とは大違ひだ  
(ぼそつ)

黒「死んどけ プラズマランサー一斉放射」

ぐばばばばばば・・・その・・・魔法は・・・まだ本編に

黒「出てきていないがここは時間のながれがないから大丈夫だ」

ミ「えつと・・・なんで作者は死んでるんですか？」

黒「気にするな」

ミ「えつと・・・」

黒「氣であるな

「……ここ（怖こよーーー…なに）」  
「……………」

黒「さて、作者が死んでしまったので俺達で終わらせたこと黒

勝手に……殺す」<sup>アリス・マーリン</sup>「……………」

黒「では黙文でしたが読んでもいたいてありがと」<sup>アリス</sup>「……………」  
「これからもよろしくお願いします」

## 第四話 異世界を知る（前書き）

しまつた・・・日付が変わる前に投稿しようとしたのに間に合わなかつた・・・

はい、四話目です。

これまでと同じく読みづらい文章ですが、それでもよろしいかたはお読みください。

それではどうぞ。

## 第四話 異世界を知る

わて、俺は周囲を警戒しつつコトアと会話をしながら歩いていた。  
「あむヒリコトアがこそこな」とを言に出した。

「しかし・・・フホレルシア王国の王女と云つたら結構有名なんですかけどねえ・・・  
本当に聞いたことがないんですね?」

「ああ、マジで聞いたことはねえ

「マジ? とはなんですか?」

「あー・・・俺が住んでいた所の言葉で、本当にこいつ意味だ」

「うーん・・・マジ・・・ですか・・・聞いたことがないんですね?」

「まあ聞いたことがないのも無理なこともあります?」

「俺が住んでるとこは多分コトアたちのところと呼ばれてるだ

ら?」

「やうなんですか? どこかレンセイヒビの出身なんですか?」

「んー・・・それを説明する前にまあこの世界のことはこの近くへのへ近いの事を教えてほしい。」

「なんせ転移事故に巻き込まれたと思つたら知らないところに一人ぼっちだったからな?」

「それに俺が住んでいたところではフホレルシア王国なんて国は存

在しなかつたからね。

だからとりあえず「この常識を知りたいと思つんだが……」

さすがに一度死んだとか言つても信じてはくれないだらうしな……

「て、転移事故に巻き込まれてよく無事でしたね……」

「あー……まあ運が良かつたんだる」

くつ、こんな純粋な子を騙しているようで気が重い……  
・・・ 実際騙してるんだがな。

「せうだつたんですか・・・そつこう」となら私がこの世界の事を  
教えましょう!」

・・・ 胸を張つて元気よくそんなことを言つマリア。  
どうやらこの子は困つている人を助けるのが大好きなようだ。

「ああ、よろしく頼むよ」

「それではまずはこの世界の地理のことを教えますね」

「この世界は大きく分けて3つの大陸でできています。  
まず一つ目は私たちがいるこの大陸「アイビス大陸」」

「このアイビス大陸は主にヒトが住んでます」

「ん? 主にってことはほかにも種族がいるのか?」

「はい、この世界には主にヒト、エルフ、ドワーフ、竜人、冥族、

獣人の6つの種族がすんでいます。

各種族の説明はあとでしたいのですがそれでいいですか？」

「ああ、頼むよ」

「続けますね。アイビス大陸は基本的にはヒトが住んでいますが、それ以外の種族も数多く住んでいます。

また、このアイビス大陸を4つにわけるように国が分かれています。右下の「ルクセリア共和国」、左上の「レジエンティウス皇国」、左下の「アマルフィア帝国」

そして、私たちがいるここ、右上の「フェレルシア王国」、「に分かれています。

4つの国にはそれぞれ色と旗印にしている特徴があり、簡単に説明すると、

ルクセリア共和国は緑色で共和を旗印にしており、レジエンティウス皇国は青色で旗印は信仰です。

アマルフィア帝国の色は赤で、旗印は争乱にしており、フェレルシア王国は黄色で団結を旗印にしています。

そして国ごとに司っている属性があり、国の色がこれを表します。緑のルクセリアは風を司っており、青のレジエンティウスは水と氷。

同じように、赤のアマルフィアは火を、黄のフェレルシア王国は地と雷を司っています。

一気にいいましたが大丈夫ですか？」

「ああ、問題ない、続けてくれ」

「はい、4つに分かれている国の力はほぼ同じで、この4つの国がそれぞれ均衡していることで

平和が保たれています。また、4つの国にはそれぞれ得意する分

野が存在し、

ルクセリアは農業を、レジエンティウスは学問を、  
アマルハイアは軍事を、フェレルシアは商業を得意としています。  
4つの国はそれぞれ足りない所を補い合っていますので、  
どの国もなくてはならないものになっています。  
この大陸については以上ですがよろしいでしょうか？」

「ああ」

「そういえばもうひとつありました。

国の王族はその国が司っている属性の適性が必ずあります。  
そして、王の一族は必ず髪の毛の色がその国が表す色になります」

「ふーん、だからミリアの髪はきれいな金なのか・・・」

「あ、ありがとうございます・・・//  
つ、続けますね・・・」

「あ、ちょいまち、適正ってなに?」

「えと、適正というのはですね、魔法をどれくらいの力で扱えるの  
かを表すものです。

これは段階でわかれています、

その属性の魔法は全く使えないFからE・D・C・B・A、Sと  
上がっています。最高はSです。

適性が高ければ高いほどその属性の魔法を使いこなすことができ、  
威力があがっていきます。

とはいえる普通の魔道士だとDくらいが普通で、熟練といわれる魔  
道士でもBくらい、

大魔道士と呼ばれるような人たちでもAがあればいいほうだとい

われます。

「適性持ちの人はそのほとんどがなんらかの形で歴史に乗つているような魔道士ばかりで、

そういう人たちを「偉大なる魔道士」と呼びます」

「なるほど・・・//リアの適性はどうなつてんの?」

「私はですね・・・雷がB、地がC、水がDで他はすべてFです」

「ふむ・・・それってすげーほつか?」

「私はあんまりそつは思いませんけど・・・かなりの方だとこういふですよ?」

「へえ、すげえな・・・ん?てことはだ・・・俺いる意味無し?」

「いや!?そんなことないですよ!?それに私戦つたことありますよ!?」

レンさんがいないと私困りますよ!?

「そ、そつか・・・そりやよかつた・・・」

「め、迷惑とか思われていなくてよかつた・・・

「まったく・・・本当にいないと困りますからね?いなくならないでくださいよ?」

「あ、ああ、わかつた」

「それでは次の大陸の説明に入ります。次の大陸は「ゼクンディウ

ス大陸」です。

この国は冥族が他の種族を支配しています。  
しかし、差別というものはほとんどなく、全ての種族が平等に扱  
われているそうです「

「・・・」の大陸では差別があるのか?」

「基本的には平等な扱いなのですが、  
嘆かわしいことにヒトが他の種族を弾圧している所もあるそうで  
す・・・」

「そうなのか・・・」

「続けますね。

ゼクンディアス大陸とアイビス大陸の間では争いが起きています  
たが、

現在はアイビス大陸の4つの国全てと友好条約が結ばれており、  
友好への道を歩んでいます。

この大陸には国は1つしか存在せず、その国が大陸のすべてを支  
配しています。

国の名前は「ラグレスティア国」といいます。

その他のこの国の情報は少ないのですが、  
これは絶対に正しいと言えることはのは王族は闇の魔法を使い、  
髪の色は銀ということだけです」

「・・・その情報いるかい?」

「ま、まあいいじゃないですか。知つて困るようなものでもないで  
すし」

「まあいいけど……んで、最後の大陸は？」

「えーと、最後の大陸なんですが……」

「どうした？」

「「」の大陸について知っている人って「」く少数なんですよね……」

「なぜ「」？」

「理由としてはこの大陸との交流はないんですね」

「行つた奴はいないのか？」

「いるにはいるんですが……  
その大陸に向かつた者で帰つてきたという人はいりませんよね。  
・・」

「・・・ホント「」？」

「そう言われていますよ。あとは神がいるとかどうとか……」

「神がいんのか！？」

「ひやう！？い、いきなり大声を出さないでください！」

「わ、わりい・・・」

「全くもう・・・一応そういう風に言われているみたいですよ。  
確認したことがある人は誰もいないそうですが・・・」

「つまりいるかどうかはわからねえってことか？」

「はい」

「ふーん・・・」

神、ねえ・・・元の世界とは違う神だとすれば・・・  
その神はいきなりこの世界に現れた異物である俺をどう思つている  
んだろうな・・・

「聞いてますか？続けますよ？」

「あわりい、続けてくれ」

「この大陸の名前は不明なのですが・・・  
名前がないと不便なので、私たちはこの大陸を神が住む地、アル  
カディアと呼んでいます

「アルカディアねえ・・・」

理想郷、つてか。また大層な名前だこと・・・

「これでこの世界の主な地理に関しての説明はおしまいです。  
続いてこの世界で生きている人達の事を説明したいのですが・・・  
この世界には主に6つの種族が暮らしていることは説明しました  
よね？」

「ああ、ヒト、エルフ、ドワーフ、竜人、冥族、獣人の6つだろ？」

「はい、それで会つてます。

では次は一つ一つの種族を詳しく説明していきますね。

まずは私たちヒトです。

特にこれといった能力はありませんが、手先が器用でものを作るのが得意な種族です。

私たちは何かの精霊に好かれやすいといつことは無いので、魔法を放つには自分の力で全てを行わないとけません

「精霊つーのは？」

「この世界を維持しているといわれる存在で、世界のどこかで私たちを見守つているとされています」

「へえ・・・ウンティーネとかもいるのか？」

「よく知つてますね・・・ウンティーネといつのは水の精霊の一種で、ルクセリアにあるヤーラン湖にいるとされています」

「へー・・・」

やべえ、怪しまれたかもしれん。

「ウンティーネの事を知つているといつことは

案外近いところにレンさんの故郷はあるのかもしませんね！」

「あ、ああ、そうかもな」

純真でなによりだ・・・

「続けますね、次はエルフです。

エルフは森の民とも呼ばれ、魔法を得意とし、魔力が多い種族です。

また、風の精霊に好かれやすいという特徴を持ち、風の魔法が得意な人が多いです。

その次はドワーフです。

ドワーフもエルフと同じく森の民ともよばれていますが、魔法は苦手で力が強い種族です。

また、土の精霊に好かれやすく、ドワーフが作った武器は土の加護を受け、

長持ちしやすいという特徴をもっています。

その次は竜人です。

竜人は竜が時の流れに合わせてすこしやすいように体を変えた種族と言われており、

山の中にすみ、魔力がない代わりに強い力を持ち、竜人特有の能力をもつといわれています。

竜人は様々な属性に分かれており、属性によって、火の竜人、水の竜人と分けるそうです。

そして冥族です。

冥族の発祥は不明なのですが、古代文献の多くには、気が付いたらそこにいた。と書かれています。

闇の精霊の加護を強く受けており、強力な闇の魔法を使いこなしますが、

それ以外の属性の精霊には嫌われており、闇以外の魔法を使うことはできません。

また、夜の民とよばれており、夜になるとより力が強くなるとのことです

「冥族っていうのはアンデットなのか？」

「アンデットと云うのはそういう種族のモンスターで、冥族にアンデットと言つるのは禁句で、

仮に言つてしまつた場合「その場で殺されてしまつても文句は言えないので

決していわないようにしてください」

「・・・聞いたよかつたよ

「ですね・・・

そして最後は獣人です。

獣人はその名の通り、獣たちが人の形をとつたもので、非常にたくさん種類にわかれています。

元になつたものがなんであるかでそのあり方が大きく変わるのでまとめては言えません。

一番数が多いといわれる猫が元になつた猫人は、魔法が使えない代わりにすばしつこくそです。

以上で種族についての説明を終わります

「ありがと。他に聞いておくべきことはあるかい?」

「そうですね・・・お金の価値ってわかります?」

「わかんねえ

「そうですか。ではお金についても説明したいと思います。

この世界の通貨はニルで、銅貨、銀貨、金貨、白貨、黒貨の5つのお金があります。

銅貨が100で銀貨1つ、銀貨100で金貨1つ、金貨100で白貨1つ、白貨100で黒貨1つになります。

価値は・・・確か普通に暮らすなら1日銀貨10個くらいでよか

つたはずです

「なるほどね・・・んじゃこの近くの事を教えてくれないか?」

「はい。いま私たちがいるのはフュレルシアの南の国境近くで、この街道をこのままいくと、ルクセリアとの国境に位置するジョンニス町につきます。ジョンニスは比較的大きな町で、国境にあるだけあり人の流通が激しい街です。レンさんもここにつけばここのことがもっとよくわかると思いますよ?」

「そうなのか・・・ミリアはなんでジョンニスに向かつてたんだ?」

「一応第三王女とはいえ姫なので街の視察に向かつていたんですよ。まあ今回の事件で視察は無しでしようけど・・・」

「あ・・・わらい・・・」

「いえ・・・」

「・・・」

やべえ・・・氣まずい・・・

「あ、んじゃやーーーの道を逆に進むとどこに着くんだ?」

「えつとですね、この道は途中いくつかの街の中をとおりますが、最終的には王都につきます。

8日前に王都を出てここまで馬車で来たのですが・・・

「あ・・・」

「「・・・・・」

あ・・・氣まずい・・・！

・・・

s.i.d.e ミリア

駄目です・・・あのことに近い話題が出ると仮まづくなるとわかつ  
ていても  
どうしてもあの事を思い出してしまうことがあります・・・

突然近くの森から出てきた賊・・・

騎士たちに絶対に馬車から出るなど言われたこと・・・

騎士たちと賊の戦いの声・・・

戦いの音が止んだ時の希望・・・

知らない人が入ってきたときの恐怖と絶望・・・

外で騎士たちと賊の死骸を見たときの悲しみと虚無感・・・

全部まだ残つてます・・・

でも全部忘れなきや・・・

レンさんがいるから薄れているけど・・・  
もしレンさんがいなくなつたら・・・私・・・恐怖と悲しみに押し  
潰されそうです・・・

## 第四話 異世界を知る（後書き）

えー・・・今回のあとがきは余話は無しです。

皆さん読んでくださいありがとうございます。

## 第五話 少女の涙

あのあとあの『氣』ますわはすぐになくなり、

ミコトと俺は、楽しそうじゃべりしながら街道を歩き続けた。

とはいっても話の内容は国の成り立ちや魔法の呪文など  
異世界講座とこにふさわしいものだったがな・・・

ふと氣付くともう空は赤く染まり、太陽が沈み始めていた。

「なあミコト、そろそろ歩くのをやめて今日の寝床を確保しないか  
？」

この道をいけば街につくとわかった以上俺一人なら夜になつても歩  
き続けるところだが・・・  
ミコトはそうはいかない。  
小さな女の子の身で寝ずに夜を歩くのは厳しいだろう。

「そうですね・・・そろそろ暗くなつてきましたし、どこか寝られ  
そうなところを探して  
そこで今日は寝ましょつか」

「よし、んじゃあもう少し先に森があるし、その近くで火を焚いて  
そこで休もうか」

「はい」

・・・

空が暗くなり、夜が深まってきたとき、ちゅうじやすめそつな場所を見つけると、

俺はミコヤをそこに置いて枝集めと食糧集めのために森の中へ入つて行こうとしたんだが……

「私もついていかせてください……」

「あー……」

「……ミコヤがついて行きたいところのである

「いや、もう真っ暗だし森の中で動くのは危ないぜ?」

「それはレンさんも同じはずですー。」

「つひてもなー……ミコヤ、自分の服装見てみ?」

「はー?」

俺の言葉に反応してミコヤは自分の服装を見まわした

「さすがにその格好で森の中で森の中に連れていくわけにはいかねえわ、大変なことになるぜ?」

「う・・・」

やつ、今のミコヤの恰好は白い、古スロリ的な服……  
そんな服で森の中に入つたら服が枝に引っかかつてビロビロに破れること間違いなしだらう

服の替えがない今、服を傷つけるのはなるべく避けたい

「まあいいで待ってる、ようじかこまでこって枝や果物を集めるだけだしすぐ戻つていい

「でも……」

「こじや行つてくるわー絶対こいで待つてみよ——————」

「あ、ちよつヒー・レンさんー?..」

俺は//リヤに動かなこようひて枝集めに走つた。

・

side // ヤ

「あ、ちよつヒー・レンさんー?..」

行つてしましました・・・

「どうしましょつ・・・」

本音を言えれば追いかけたい・・・でも・・・

「追いかけて見つけられなかつたらもつと怖いし仮に見つけたとしても

勝手に動いたから呆れられるかもしれないし・・・

結局レンさんが早く帰つてくれる」とを願いながら待つ」とこしました

ザアアアアアアアツ

「ひひひひー？」

な、なんで風もないのに木が揺れたんでしょう・・・  
そういうえば襲われた時も風もないのに賊たちが飛び出してきた森の木が揺れていましたね・・・

「・・・（ブルブル）」

・・・怖いです。一人になるとあの時のことを思い出します。

恐怖と悲しみが私をおおいます・・・

それに一人でいると誰かに襲われるかもしれないという恐怖が・・・

「ひー――――――――？」

怖い、怖いです。

思い出してしまった恐怖と悲しみ、

それといつまた襲われるかという不安が私を襲います・・・

こうして一人になるとレンさんがいてくれたことの大切さがよくわかります。

もしあの後レンさんが私についてきてくれなかつたらと思つとゾッとしてます・・・

「グスツ、怖いですよう・・・早く帰つてきてください、レンさん・  
・」

ガサツ！

「つー？」

森の木の枝が揺れました・・・  
もしかしたらレンさんが・・・！

ガサガサツ

「グスツ、はや、く、グスツ、泣きやま、ない、と・・・ヒクツ」

ガサガサガサツ

木の揺れの音はどんどん大きくなつています・・・  
段々こちらへと近づいているようです・・・

「あう・・・ヒクツ、なんで、涙、止まら、ない、の・・・」

レンさんに見られたら大きな心配をかけることになります・・・  
それだけは避けないと・・・

ガサガサガサガサツ

木の揺れが見える距離まで近づいてきました・・・

「つづつ・・・止まつて、ヒクツ、よう・・・」

ガサガサガサガサガサツ！

ひとつう物音の正体が森から出てきてしましました・・・

・・・森から出てきたのはレンさんではなく・・・

「あ……」「ああう……」「・・・」

大きな大きな  
・  
・  
・

「…つ・・・あ・・・」

一本の足で立つモンスターでした・・・

•  
•  
•

「んー・・・ 食えるようなもんは無かったかー・・・  
まあ燃えそうな枝は見つかつたらしいだろ」

「この森はどうやら果物がなる木は無いらしい。  
代わりと言つては何だが燃えそうな木が大量におちていた。」

「まあとつあえず戻るわ。ミロヤを待たしてることだし・・・」

「まさか夜の森に興味がある・・・なんてないよな・・・

もしさうだつたら俺の中でのお姫様のイメージが大幅に書き変わる  
ことになるぞ・・・

「しかし・・・なんだこの奇妙な気配は・・・」

さつきから妙な音がする・・・それも森の至る所から。

「なんかの声みたいなんだがな・・・小さすぎて聞こえん・・・幻  
聴か?」

「ではない、と俺の中の何かが否定する

「少しづつ大きくなつているからもつすぐ聞き取れると思つんだが  
な・・・」

・・・・・・・・

・・ケ・・・・テ・・・

「なんだ・・・何を言つてゐる・・・?」

・・ケ・・・・ゲテ・・・

「もうちょい・・・もうちょい大きく・・・!」

・・ケテ・・・・アゲテ・・・

「もう一聲・・・!」

タスケテアゲテ・・・

「つづ!?」

タスケテアゲテ・・・

「なんだ・・・」の声は・・・助けてあげて・・・だと?」

タスケテアゲテ・・・

「何を・・・助けると・・・・・・」

タスケテアゲテ・・・

「何を・・・」

タスケテアゲテ・・・

「つつつつー?まさか!?」

俺はその考えを浮かべた瞬間、走りだした。

「くそつー当たつてほしくねえけど・・・!」

タスクニアゲテ・・・

「急げ・・・！」の声がもじあいつのことを指すなら・・・！」

タスクニアゲテ・・・

「ミコヤが危なえつ・・・！」

・・・

side ミコヤ

「あう・・・うあ・・・あ・・・」

「グルルルルル・・・」

森から出てきたモンスターは私を見つめて唸り声をあげています・・・

・

「う・・・うう・・・」

「う・・・うう・・・」

怖い・・・怖いです・・・私はここで死ぬんでしょうか・・・

「嫌・・・死にたくない・・・」

せっかくレンさんに助けてもらつたのに・・・  
まだレンさんに何も返せてないのに・・・

「グルルルルルル・・・」

だけどモンスターはそんな私の思いとは関係なく唸り声をあげています。

「ま、魔法を・・・（来たれ雷の妖精たちよ 槍となりて敵を穿て）  
プラスマ・・・ランサー・・・！」

・・・・・

「な、んで、発動、しない、の・・・？」

「グルルルルルルル・・・」

「ひつ・・・いや・・・あ・・・死にたくないよ・・・」

誰か・・・誰か助けて・・・

「グルアアアアアアツ！－！」

「助けてレンさん－－－！」

・・・・・

「・・・え？」

「生きてる・・・なんで・・・？」

確かにモンスターが私に爪を振りかざして・・・

「悪いミコヤ、遅くなつた」

「え・・・」

そこへいたのは・・・

「怖がらせりまつたな・・・ごめん」

私のことを助けてくれた・・・

「もう大丈夫だ、お前のことはばつてえに守る」

背中の頼もしい不思議な少年でした・・・

「レン・・・わん・・・」

・・・

side レン

「レン・・・わん・・・」

「おひレンだ。今からこいつを倒すからそこで見ててくれよな！」

モリヤに軽口を叩いて

「覚悟しろよモンスター……イリヤを泣かせたのは俺のせいだが・

・・・

俺は

「・・・まあやつあたりとこいつやつだ、殺させてもうひばー・」

キレた

・・・

「最初っから飛ばすぞ・・・不動黒羽流秘技亞流！轟波連斬刃・雷  
！」

ここに来るまでに作つておいたプラズマソードに魔力を叩きこみ、  
連續で雷の刃を飛ばす。

「ガアアアアアアアアアッ！…！」

モンスターに当たつた刃はモンスターを傷つけ、さらに電撃を走ら  
せる。

「チッ・・・浅いな・・・」

確かに聞いてはいるものの特にモンスターの動きを抑えられるわけ  
ではないようだ

「なら……」

俺はモンスターの懐へ一気に駆けこんだ

「ガアアアアツ！」

モンスターが爪を俺に向かつて振り下ろす

「ふつ・・・・！」

チツ

ギリギリかわしきれなかつたのか、爪は俺の頬を掠めた

「だが、懐には入つた・・・決めさせてもうひがい・・・

ふつ・・・・」

俺はモンスターの腹を蹴り上げる

「はつ

持ち上がつたモンスターの体を回し蹴りで上に蹴り飛ばす

「せせは

飛んで行つたモンスターに向かつて飛び、プラズマソードで斬る

「はあつー」

そりひで斬る

「せあつー。」

斬る

「ぜやつー。」

斬る

「でやつー。」

斬りまくるー

「せやああああつー。」

上に上がったモンスターをかかと落として下に落とす

「とじめだ・・・不動黒羽流奥義・・・竜牙滅殺刃ー。」

「ギイヤアアアアアアアアーーーー！」

最後にモンスターに向かつて落ちながら剣で突き刺すとモンスターは断末魔を上げて死んだ・・・

・・・

「大丈夫か？」

モンスターの生死を確認した後、俺がミリヤに向かつてそういうと、

「レン……せん……レンセーん……！」

そうじつて泣きながらリコヤは俺に抱きついて来た……つてなん  
でさーー？」

「わたつ、し、グスツ、すゞ、く、こわく、て

「ひとり、つで、まつてゐつ、とき、こ、グスツ、おそわ、れたと、  
きの」と、グスツ、思い出して

「もんすつ、たあが、でで、グスツ、きたときには、もつ、グスツ、  
しんじや、うと、思つ、て」

「それつ、で、すつ、じくわく、て、グスツ」

・・・・・そうか・・・・・俺が襲われた時の思い出につながる」とを言つ  
た時以外は

普通に話していく大丈夫だと思つていたけど・・・

「グスツ、ううつ、あうつ・・・」

本当は襲われたことへの恐怖は残つていたのか・・・

「つ――――――・・・・俺の馬鹿野郎」

そりやそりや・・・・・襲われたことへの恐怖なんて簡単にはこれ  
やしない。

ましてや襲われたのは今日だ・・・

一緒に歩いている時に全然おびえている様子を見せなかつたから

無意識の内にてっきり恐怖がされたんだと思つりました……

「……『じめん』

「グスッ、なん、で、レン、さんが、あやま、るん、です、か？」

「//ココヤがおびえてるのに気付けなかつたから」

「そん、な、それ、は、わた、しが、かくし、て、た、グスッ、からで・・・」

「でも怯えていたのは本当だらつ？」

「・・・は、い」

「だから『めんだ。俺は君の護衛なのに君を守る』ことができなかつた」

「え・・・？」

「確かにモンスターからは守つたかもしれない。  
けど、依頼人の心が守れないようでは護衛失格だよ・・・」

「そんな！・・・一緒にいるときには私はしつかりできていきました・・・

「一人になつたときに怖くなつたのは私が弱かつたから・・・」

「いや、そういう問題じゃないんだよ。

護衛なのにミリヤを一人にして怖がらせてしまった。これだけで俺が悪い理由になる

「そんなこと……！」

「だから//リヤ、俺は君の次の命令を絶対に聞く。  
死ね、と言われば死ぬし、死んでも私を無事に街へ届ける、と言えば、この身がどうなろうとも、  
君を絶対に無事に届ける！」

「そんな、死ぬだなんて……」

「いや、これは俺なりの護衛失敗へのけじめのつけかたさ。  
失敗したことに対してもけじめをつけんと俺の気が済まん！」

俺はこの異世界にきて浮かれてたらしい……  
こんな簡単なことを忘れるほど楽しむとは……  
現世の親に顔向かができねえ……

「わあ、なんでも言つてくれ！」

・・・

s.i.d.e //リヤ

「わあ、なんでも言つてくれ！」

「ううううううーー私が泣こちやつたからレンちゃん」とを  
言わせちゃつた！

「えと、なにか言わないと駄目ですか？」

「ああ、なしじゃ駄目だ」

……………ううなるとなんかを言わなことやめてくれないよ。  
……………いよね、怖いのは本当だし。…………うう

「あ・・・」

……………いよね、怖いのは本当だし。…………うう

「えつと・・・じゅあ私を」

「私を?」

「だ・・・」

「だ?」

「抱きしめてくださいー！」

「い、言ひちやつた・・・

「・・・はー?」

「は、早く抱きしめてくださいー！それが私の命令ですー！」

「えつと・・・え、なんで抱きしめる?..」

「いいからー早く抱きしめてくださいよー。」

は、恥ずかしいんですからー…………

「えっと、いいんだな？」

「早くー。」

「・・・んじゃ失礼」

ギュウ

「あ・・・」

あつたかい・・・

レンさんの温かさが私の奥底まで入り込んできちゃう・・・

「う・・・うあつ・・・」

まずいです・・・また泣いちゃいます・・・

「・・・泣きたかったら泣け。その方が悲しみも晴れるだろ?」

・・・いいんですね

「うあ・・・う・・・」

「うわあああああああんつーーーー」

「うつて私はレンさんに抱きしめられながら・・・

思こっ思こつ泣こてしまふこおした・・・

・・・

side レン

「寝ちまつたか・・・」

泣き疲れてそのまま寝たみたいだな・・・

「ふわあ・・・俺もねみいや・・・」

俺も横になつて寝るためニコニヤを離さつとするが・・・

「・・・離れねえ」

ニコニヤの手が俺の服を掴んで離してくれねえ・・・

「・・・じょうがねえ、」のまま寝るか

あぐりをかいて寝るのであつた。おれはニコニヤに服を掴まれたまま、

## 第五話 少女の涙（後書き）

いやー やつと書けたよ・・・あとはぐつすりねるだけだばーっ！？

黒「」のくそ作者あー！」

な、なんだよ黒羽・・・

黒「なんだ、じゃねえ！なんだあればー！」

なにがだよー

黒「なんで俺の過去に何かがあるよつて書いたんだよー！」

あー・・・それね

黒「俺は現世では普通（？）の高校生だつてハテナをいれるんじゃねー！！！」

まあ過去になにかがあるとおわせた理由はー

黒「なんだ・・・？」

過去に何かある人ってかつこいこじやん！（キラー）ン）

黒「（ぶかり）キーワンじや、ねえええええー。」

ドガーン

黒 一 は あ、 は あ、 くそ 作 者 め ・ ・ ・ 「

「………………」

黒一はあう、いや、なんでもねえ」

三三

「んじゃ 作者不在ですかここで終わりにしたいと思います」

――駄文ですが見ていただきありがとうございました」

黒一それではみなさん！」

黒!!!「『』の小説をよりしきおねがこしうめ」

ぐふつ、俺が死んでも第一・第三の俺が・・・・「メテオ」！――！



## 第E×話 夢（前書き）

外伝第一話です。

今回は主人公の夢の中となっています。

いつものように読みづらいですがそれでもよろしい方はお読みください。

でははじめます。

## 第E×話 夢

「おこーーー起きるーーー。」

「うわあつーーー?」

俺は親父の声で飛び起きた・・・

「つてみてよ・・・?」

確か・・・俺は死んで異世界に行つたはずじゃ・・・

「ちよ、ちよいまり親父ー殴るのはなしだー!」

「なに・・・?」

その声がした方に振り替えると・・・

「黙れーーーつもつも寝ぼけやがつてーーー今日は手加減しねえぞーーー!」

「ちよ、ちよ、ああああああーーー!」

・・・親父に殴られてベットの上から吹き飛ばされた俺がいた。

「・・・なんでも」

・・・

落ち着いた後に状況を整理してみると、やはり俺は、

自分の過去を夢で見てこらりじ。

「やついや死んだ時に色々後悔があつたな・・・そのせいか? こんな夢を見んのは」

・・・まああの時の後悔でここにこれたのならあの時の俺に感謝しようと。

夢とはいえ現世に戻つてこれたんだ。

またあの世界に戻つた時にためになることをしておら。

「うーん・・・よし、あの異世界は戦うことが多いみたいだし、道場で剣の練習をすつか」

俺の家は不動黒羽流といつ剣術が代々伝わっている家で、俺はことあるごとに親父に教えを受けてせられていた。

「現世で生きてた時にはまだ全ての技を習得できてなかつたからな・・・

あー・・・こんなことになるんならもつと練習の時間増やせばよかつた・・・」

まあ後悔しても後の祭りだ、それに夢とこいつ形でだが現世に帰つてこれた。

「せつかくの機会だ。田覚めるまで剣の練習をするとすつか

・・・

そのあと俺は一日中剣の鍛錬をした。

かなりの時間鍛錬したが、体の疲れが全く出ずずっと鍛錬するこ

とができた。

夢つてすばらしい……

「ふう……しかし」の夢が親父が一日鍛錬する日の夢でよかつた  
ぜ。

まだ習えてなかつた技も知ることができた

親父が道場で剣の技を色々練習していたから、  
そのなかで見たことのない動きがあつた技を真似して自分のものに  
することができた。

「しつかしこの夢こいつ終わるんだうつか……始まつてから結構た  
つしてゐぞ?」

まさかこのまま誰にも気がつかれることなく……想像したら怖くな  
つた。

「おい

「うつうーー?」

「はー

び、びっくりした……俺の方に声かけたもんだから俺が見えんの  
かと思つた……

「今日はお前にある方を護衛してもいいつ

「護衛任務ですか?」

「そうだ」

・・・もしかして

「お前に護衛してもうるのは如月蒼。如月グループの『令嬢だ』

やつぱり・・・あの日の夢か、これ・・・

・・・

実は俺の家は俗に言つ裏の仕事というやつを受けている。  
俺はよく知らんがその道では結構有名な一家らしい・・・

ちなみに俺は現世では人を殺した事はなかった。

というのも俺が受けた任務は全て護衛任務で、  
襲われた時も速やかに護衛対象を安全なところへ連れていくのが俺  
の主な仕事だつたからである。

もちろん逃げるときに追つ手と戦つたことはあるが、  
ほとんどの場合親父がどこからともなくやつてきて追つ手を倒して  
しまうため、

俺は人を殺すということを経験したことはなかつた。

「まあ異世界で人は殺してしまつたわけだが・・・

したくてしたわけではないが、結果として俺は人を殺してしまつた。  
それも何人も・・・

「・・・ははっ、気付けてなかつたのはミリヤの事だけじゃなかつ  
たつてか・・・

「どうやら俺自身、人を殺したショックは大きかったようだ。

今こうしてあの時の事を思い出すと、賊たちの死の瞬間が鮮明に蘇る。

「どうやらミリヤよ・・・助けられてたのは俺も同じみたいだぜ・・・

・

あのあとミリヤについて行かず俺一人だつたら、

俺は一人でいつまでもその事を考え続けてしまつただろう・・・

「・・・だが、俺の場合はこれを薄れさせるわけにはいかねえんだ・

・

ミリヤはあの事を忘れていいが、俺は忘れてはだめだ。  
人を殺した。その事はけつして忘れてはだめだ・・・

「・・・黒羽の撃そのハ 人を殺したときはその事忘れるべからず」

黒羽流の撃にこんなものがある。

現世にいたときにはこの撃の意味がわからなかつたが・・・今なら  
わかる。

「人を殺したことを忘れればやがてそれに慣れてしまう。

人を殺すことに慣れてしまつたものは人ではない。獸と同じだ・・・

・

・・・まあ慣れたいものではないがな。

「人を殺すことに慣れるな。・・・その事を改めて確認できたんだ。

「この夢を見れてよかつたよ」

•  
•  
•

自分で結論を出したあと、俺はある場所へ向かつた。

「たしかにこらへんだつたよな・・・つとこじだこ」

俺が向かつたのは郊外にある公園だ。

一 じこで薺と出合ふたんだけ・・・

俺がこの任務で護衛した蒼と出会ったのがこの公園である。

「どういたんだっけ……」

確かあの時は

「何してんだ？」

「え・・・?」

「如月蒼だよな？」

うん

・・・そうだ。あのプランノに座っていた蒼に離しかけたのが最初  
だつたな。

「俺はお前の護衛任務を受けた黒羽蓮だ。」

お前の親からお前を探せと言わされたので迎えに来た」

「・・・・・」

「一緒に来てもうらえるか?」

「ぶふつ」

「に、任務のときは感情を表に出すなって言われてたけどもう少し愛想良くじろよな俺」

「・・・嫌」

「・・・嫌と言われてもいつも仕事なんだがな・・・」

「・・・」

最初の方はホントに無口だったつけ・・・  
このときもびづひづつて連れて行こうか悩んでた記憶がある・・・

「あー・・・なんで帰るのはいやなんだ?」

「・・・・つまんないから」

「子供かよ・・・」

「・・・・・・・」

「んー・・・・・ビづいたら帰つてくれる?」

「・・・あなたが」

「ん、俺？」

「パーティーの間あなたが私と一緒にいてくれるなら帰る」

「え？ それだけでいいのか？」

「・・・（口クン）」

「そんなことでいいならずっと一緒にいてやるが・・・」

「・・・ほんと？」

「ああ

「・・・じやあ帰る

「わかった、んじや時間がやばこし俺がつれてこべや？」

「・・・じやひつへ？」

「ちよい失礼

「な・・・離して・・・（バタバタ）」

「我慢してくれ、これが一番早いんだ。んじや行くぞー。」

「ひやうー？」

俺は蒼を抱きかかえて走つて行つてしまつた。  
所詮お姫様抱つこといつやつで・・・

「あー・・・そういうやあの時かなり焦つてたっけ・・・」

会場に着いたとき蒼の眼が回つてまた焦つたなw

「ふう・・・あいつを見れてよかつた・・・」

この任務の後蒼と仲良くなり、よく一緒にいるようになつた。

「あいつらとは色々やつたがどれも楽しかったな・・・」

元々仲が良かつた4人と蒼を加えた5人で色々やつたっけ・・・

「・・・もうあいつらとも会えないのか

」

「・・・だけど、俺はあの時にこの世界から死んだんだ」

「後悔したつてそのことは変わらない」

「元の世界の事で悲しむのはこれが最初で最後だ」

そう言つと俺の体から光が發せられる。

「夢から醒めるのか・・・」

「・・・親父、お袋、圭一、亮、薫、玲菜、蒼」

「俺は違う世界で生きるヤジ・・・」

「この世界で生きていたとは絶対に忘れねえ」

光が激しくなってく

「ここまで一緒にいて楽しかった」

「だから呪、ありがとう一・じやあなー・」

そうして俺は

夢から醒めた・・・

・・・

s.i.d.e 蒼

「・・・あつがとつー・じやあなー・」

「うひーーー?」

蓮君の・・・声?

「どうした? 蒼」

「・・・「うん、なんでもない」

「・・・ありがとうね蓮君」

なぜかはわからないけど私はそんなことを口にしていた・・・

「私も楽しかったよ」

「ばいばい・・・」

私の頬には、蓮君が死んで枯れたと思っていた涙が流れていた・・・

## 第E×話 夢（後書き）

黒「……届いてたのか……最後の言葉……」

いやーよかつたね

黒「ああ、これで現世に思い残すことはないえ」

そつか・・・といひで剣術すべて修めてなかつたんだね

黒「ああ、大体の技は教わつたんだがまだ一部の奥義はおしえてもらつてなかつたんだよな」

そつなのか・・・で、この夢でそつこつた技を身につけたと?

黒「全部ではないけどな」

ふーん・・・しかしもとから体のスペック高かつたんだねえ。  
まさかお姫様抱っこで走れるとは・・・強化の必要なかつたか?

黒「え? それくらい普通じゃないのか?」

・・・普通は無理だと思つんだけどなあ・・・

黒「?」

まあいいや、で、この夢で殺した事と過去、両方とも区切りはついた?

黒「ああ、ひつちももつ終わったことだし翻つやる」としたよ。  
割り切るつても忘れはしないけどな」

そか、よし、んじや 今日せりやめでー。

黒「・・・いきなりだな」

だつてだらりと長くなつたんだもの・・・

黒「まあやうだな、んじや終わるか

それでは読者のみなさん、読んでいただきてあつがといわせります」

こつもの如くな駄文でしたが頑張りますのよおへお願こします。

黒「それではみなさん、また今度ー」

・  
1月10日 あとがきの一部を修正しました。矛盾していたので・

奥義と言われるような技 一部の奥義

## 第六話 着いて分かれて（前書き）

はい、第六話です。

・・・書いとがありませんね。

まあ駄文ですがそれでもよろしげ方はどうぞ、「覗くださー」。

それではどうぞ

## 第六話 着いて分かれて

「んあ、朝か・・・ねみい・・・

眩しい朝日が俺の顔を照りし、俺はそのまま眩しさで目が覚めた。

「・・・・・

しばらくぼーっとする。

「・・・うし、目が覚めた」

少し待つとだんだんと頭がはたらくようになつてくる。

「しかしながら俺はミコヤニベツつかれてるんだっけ・・・

昨日のことを思い出す。

「・・・ああ、さうか、確かに俺に抱きついて泣いてそのまま寝たんだっけ

ミコヤを見る

「全く・・・なんの夢を見てるや・・・

そこそこやかに笑いながら寝ている少女の姿があった。

「・・・・起りますのも忍びないし待つとするか

「・・・・・

といふことで、俺はミリヤが起きてるまで待つことにした・・・

•  
•  
•

Side ミリオ

・・・あこたかし・・・

何があたたかくて気持ちいいものがあります。

・・・そろそろ起きてくんねえかな」「

あなたがい何かが和から離れよ」としています・・・

調査の方法

轍のれんじ

離才集

卷之三

あなたが私を揺さします・・・

おきてくれませんか」「え

それが心地よくておなじしまへるのです……

「ナニ?」

・・・・・

「・・・・・起きるー。」

「はわわわわわわーー?」

ひゃああああー!だ、誰ですか怒鳴ったのはーー?」

「何するん・・・・です・・・・か・・・・

起きた私の前にいたのは・・・・

「起きたか寝ぼすけさん? (ひびたん) (

温かさなど微塵も見えない怖い笑顔を浮かべたレンさんでした・・・・

・・・

side レン

全く・・・・ですがに2時間は寝すぎだろ?・・・・

「まったく・・・・もう太陽はかなり高くなってるやー。」

「あつ・・・・すこません、つこ気持よくて・・・・

「ま、いいけどね」

「え・・・?」

「別に寝坊はいいんだけどね、それに今は君が主だし。  
ただもつ起きて進まないとまずいかなと思つて起しきさせてもうつ  
た」

「そ、そりですか・・・」

「それで、疲れはとれたかい？」

「え？」

「昨日あれだけ歩いてしかも最後にはモンスターに襲われたんだ、  
疲れが残っていても仕方ないと思つたんだが・・・」

「えと、私はほとんど疲れは残つてませんけど・・・それを言つたら  
レンさんはどうなんですか？」

「俺は大丈夫。全く疲れは残つてない」

「わうなんですか・・・」

基本俺は寝れば疲れがほとんど取れる。

昨日は結構しつかり寝れたから体の疲れは全て取れていた。

「んじや、そろそろ先に進むか。

街・・・ジョンスだっけか、そこまでざわくらいかかると思つ~。」

「そうですね・・・昨日かなり進めましたしそこまで距離は無いこと  
思つますよ~。」

「そつか・・・

「んじゅジユースに向かつて進むか

「はい」

・・・

「あれがジユースです」

あれから一時間ほど歩くと街が見えた。

「へえ・・・あれが・・・」

外からの様子は交易の街つて感じだ。  
街の外には市場が広がっている。

「ジユースは国境にあるので様々なものの流通が激しいです・・・  
つてこれはいいましたっけ?」

「ああ、だが何度も言つてくれてもいいよ。わかんないことばかりだ  
し」

「そうですか・・・とにかくレンさんほジユースに着いた後どうす  
るんですか?」

「どうあえず昨日説明してくれたギルドに行つてみよつと頃つ

「ギルドですか?」

「うん、とりあえずお金稼がないと生きていけないしね

「そうですね・・・確かにレンさんほどの実力があれば充分ハンターとしてやっていけると思います」

「ありがと」

異世界でテンプレとして存在するのがギルドだが、どうやらこの世界にもあるようだ。

ギルドはこの世界に無くてはならないもので、人々は困ったことがあるとき、ギルドに依頼を出すらしい。依頼を受けたギルドは、ギルドに登録した人、これをハンターと呼ぶらしい。

に依頼を受け渡し、ハンターがその依頼を解決するようだ。

依頼は多岐にわたり、日常のちょっとしたことからモンスターの討伐まで様々な任務があるそうだ。

ハンターの中には一つ名と呼ばれるものを持つ人もいて、これは困難な任務、例えばドラゴンの討伐、に成功すると、その名前を称えて名づけられるらしい。

また、非常に稀だがハンター以外でも一つ名を持つ者もあり、強大な力を持つ者や、偉大なることを成し遂げたものに付けられるようだ。

二つ名が「えられる」とは非常に榮誉なこととされ、一種の特権階級でもあるらしい。

「さて、じゃあ街に入るか」

「・・・はい」

・・・その時のミコヤの顔はびくか寂しげだった。

・・・

「はー・・・ほんとに人が多いな・・・」

街に入った俺たちを迎えたのはたくさんの人だった。

「私も始めて来ましたけど人多いですね・・・」

俺たち2人はしばらく驚きで動けなかつた。

「・・・わ、んじやミコヤをびくつれていけばいいんだ?」

「えつと、門の近くに詰め所があるって聞いたんですけど・・・あ、あそこですね」

「わかつた」

俺はミコヤを連れてその建物に近づくと・・・

「・・・姫様!・・・」

60、70くらいのおじいさんが俺たちの方に近づいてきた。

「じい!・・・」

すのヒミコヤがそのおじいさんに返事をする。

「なにー!!ア様だとー?」

「おこ、出てこー。」

「!!コヤ様が来られたぞー。」

それと同時に周りから兵士たちがぎろりと圧していく。やべえ、下がろう。

「姫様、!!無事でしたか・・・」

おじこさんガ!!コヤに安堵の表情を向ける。

「なぜじこがーーくるのです?」

「姫様の護衛の騎士たちからの定期連絡がある時を境に来なくなってしまい、

王都からジヒースへの道の周辺の街から搜索部隊を派遣したのですが、

その内の一部隊から姫様が乗っていたと思われる馬車と姫様の護衛の死体が発見したとの連絡が入り・・・姫様の遺体が確認できず、搜索を続けると聞いていてもたつてもいられず

私はジョニースに転移したのです。そしてこれから搜索に出ようかという時に姫様を発見したのです。

「無事なようでなによりでした・・・」

・・・搜索部隊が出てたのか、それなら!!コヤに教えてもらつた探知魔法をつかえば合流できたかも  
しれんかったな・・・まあこうして無事でこるんだじょじょう。

・・・とこりか面倒なことになりそりな予感がするし逃げようかな

「やうだつたんですか・・・心配掛けてしません、私が賊に襲わ  
れたとやこ

「ひらのレンさん助けられ、怪我一つなく此処にたどりつへ  
じができました」

やつして俺を紹介する//コヤ。そんなこと言つたら・・・  
あーくや、逃げれねえじやねえか・・・

周りの兵士達が一斉に俺の方へ向き直り俺に頭を下げる。  
そして兵士たちの中からおじこさんが出でくる。

「この度は、我らの姫君をお救いくださり、真に感謝いたします。  
お救いいただいた報酬は相応の物を支払いしたいのだが  
今我らは残念ながらお支払いできるよりつなものを持っておりませ  
ぬ。

なのでこれから姫様を王都に送り届けるのですが、それに着いて  
きてもらい、

王都で報酬を渡そうと思つのですが・・・

・・・こひせ、

「申し訳ありませんがその話は辞退したいと思ひます

断るところへ、こひで受け入れられない面倒なことになつそりだ。

「で、ですが報酬を払わないとこひの面倒がたちませんー。」

「かまこません、すでにコヤ姫より報酬はいただいておつますの

で

「は・・・?」

「ですよね、ミコヤ姫?」

「報酬つて・・・まさかあの話のことですかー? そんなものの私を守つてくださつたことに

釣り合つわけがないじゃないですかー!」

「しかし、あの時の契約ではそのような話になつてはいたはず。契約外の報酬を受け取ることまできません」

「ですが・・・ー!」

「それに、あの話は私にとってお金よりも価値があったのですよ」

「・・・え?」

そう、今の俺にとってあの情報はなによりも価値があった。あの話が聞けただけでも充分に護衛した報酬になる。

「まあそういうわけなので報酬はございません。」

あと一つ聞きたいのですがようしいのでしょうか?」

「そうおじこわんと言つ

「はい、なんですかな?」

「この街のギルドはどこにあるのか教えてもらいたいのですが・・・

・

「はあ・・・」の大通りをずっとと行くと広場があり、  
その広場に入つて右側に進むとありますか・・・

「ありがとうございます、ありがとうございます」

「俺はおじこやくさんうこつと、踵を返して教えてもらつた方向へ歩  
み出す。

「レンルー・

「コヤヒキアリ上あひあれる・・・

「また会えますよな・・・

振り返つて見つめたコヤの顔は不安そうだった・・・

「ああ」

「・・・約束してくれますか?..

「それは難しいかな・・・

「いやだ

「・・・やけはわかつたつていつもさじやないんですか?」

「俺にそんな常識はあてませんよ

「・・・」

「はあ・・・」

少女に悲しい顔をさせるのは俺の趣味じゃないんだがな・・・

「・・・心配すんなつて、縁があつや また会える」

「・・・本当にですか?」

「まあ神のみぞ知るつてやつだがな」

「やつですか・・・」

それきり互いに黙つてしまつた。

「・・・じやあ」

「ん?」

「じやあ私がレンさんにてこなに行きます」

「・・・へ?」

「もし暇な時ができたらレンさんを探しに行きますね」

そう、笑顔でミコヤは言った

「・・・はは、んじや見つかんないよつて隠れないとな

「隠れても無駄ですよ？絶対に見つけますから」

なにが楽しいのか知らんがここに笑っている。

「そつか・・・んじやまあせいぜい見つかんないよつに隠れています  
よ」

「はい、絶対に見つけますから覚悟してくださいね？」

「ん、んじやまた会つ時まで」

「はい、お元氣で」

やつして俺は再び歩き出す。

「（はあ・・・面倒事がひとつ増えたな・・・）」

そんなことを思いながら、

俺は笑顔を浮かべて大通りを進んでいった。

・・・

side ミリヤ

「（なんでしょうか・・・）の思い・・・）」

多分抱きしめられた時に生まれたこの思い・・・

まだこれがなんのかはわかりませんけど・・・

「それでは姫様、参りましょつか

「はー

「この思ひの正体を知るためにも・・・

「（絶対に見つけますから覚悟してへだたおへんわ）

## 第六話 着いて分かれて（後書き）

「うーん……

黒「どうした？」

「いまいちお前の行動に一貫性がないような気がするんだよなあ……

黒「それはお前が大まかなプロットを立ててないからだ」うが……

「

ぐり・・・ぐりの音も出ない……

黒「出でるやべりの音」

「うーん、まあおこねて帰えていい」う・・・

「//」とこいつが私の出番//今までなんですか！？

おお、//つや、//こにわか

「//あ、はー、//こにわかは・・・じゃなくてー」

んー・・・実はまだ//りんくんも確りとは決まってないんだよねえ・

「//あつなんですか？」

うん、基本この小説の//ハヤブトは「思に立つたら書いてみよ」

だから

実は先のことはあんまり覚えてないんだよねえ・・・

黒「つい」とはなにか?思い立たなかつたら書かないのか?」

たぶんね、逆に思つて立てば昨日今日みたいて一氣に書くかもだけど。

「つまり不定期更新なんですね?」

・・・まあいいとだな

黒「はじめから不定期宣言つい・・・馬鹿じやね?」

く、くやーーーーーーー

「あ・・・逃げましたね」

黒「逃げたな・・・わたくしあとがわむけいまだ終わつたのあこせつと  
します」

「こんな默文を読んでいただけあつがいひがれこました」

黒「馬鹿な作者ですが

一応更新する気はあるみたいのドジつか見てやつてください」

「あれではみんなー。」

黒「また今度ー。」

## 第七話 ギルド（龍書き）

あー・・・えらい・・・

一気に書くと疲れますね。  
だんだん腕が痛くなつてきました。

それでは第七話 ギルドです

びつぞお楽しみだわー！

## 第七話 ギルド

さて、ミコヤと別れた俺はギルドへ向かって街のメインストリートと並べき道を歩いていた。

「ギルドがあるのは広場の右って言つたよな・・・」

先ほど道沿いにあつた地図によると、この街は正方形に近い四角形をしていて、ギルドがある広場は街の中央にあるらしい。

また、地図を見たことでわかつたことがひとつあつた。

「この世界の言葉は英語とほほおんなじなみたいだな」

地図を見たときに字を見ると日本語と違つていて焦つたが、よく見てみると文字はアルファベットとほほ同じ形で、英語と同じように読むと意味がわかるようになつていた。

「ラッキー・・・仕事で外国人相手もあつたから英語は結構いけるんだよな・・・」

・・・といつわけで俺は文字が読めるといつことがわかつた。

・・・

「ギルドってここか？」

通りを抜けて広場に出た後、右に進んだところに大きな建物があった。

よくゲームとかで見る酒場のよつた感じの建物で、屋根のところに「ギルド」と書かれていた。

「ふむ・・・まあ入つてみるか

俺はその建物の中に入つて行つた。

「へえ・・・こんな風になつていいのか・・・」

建物の中には3つほどのカウンターがあり、そこでハンターと思わしき人が受付の人から依頼を受けていた。

「ふむ・・・登録つてどうすんだろ・・・まあ聞いてみるか

俺はあいているカウンターに近寄り、受付の人と話しかけた。

「すみません

「はい、ギルド協会ジユニス支部です。ご用件はなんでしょうか?」「ハンターの登録をしたいんですが・・・」

「はい、ハンター登録ですね?ギルドについての説明があるのですか?」「よろしいでしょうか?」「

「はい」

「では説明いたしますね。

まず、私たちハンターのことを説明します。

ハンターが受ける任務のことをクエストといいます。

ハンターが受けられるクエストは、そのハンターのランクによつてきまっています。

ハンターのランク、ハンターランクと言いますが、これは一番下のGから、F、E、D、C、B、A、S、最高のX、という風に上がっています。

このランクはハンターのおおまかな強さを表わしていて、高ければ高いほど強力なハンターといえます。

そして、クエストごとにランクが定まつており、ハンターが受けられるクエストは、自分のハンター ランクの2段階上までとなつています。

ただし、Aランク以上の任務は、

そのランク以上のハンターランクを持つハンターしか受諾することはできません。

これは、Aランク以上のクエストは、Bクラスまでのクエストよりも格段に難度が上がり、危険性が増すからです

「ハンターランクを上げるにはどうすればいいんですか？」

「自分のハンターランク以上のクエストを、決められた回数こなすことで上がります。

また、特殊な例としては、強力なモンスターを倒したときに上がる、といつこともあります」

「なるほど・・・」

「ハンターはランクによってギルド協会からの待遇が変わり、ランクが高ければ高いほど良い待遇になります。

例としては、ランクが上がれば上がるほど、ギルド内の宿が安く使用することができます

「なるほど・・・」「つ名とこうのは？」

「一つについては、ハンターランクが上になつたハンターに付けられます」

「クエストはどんなものがあるんですか？」

「クエストには様々な種類がありますが、主にモンスターを退治する討伐クエスト、何かを取つてきもらつ採取クエスト、モンスターなどから依頼人を守る護衛クエスト、雑務などをこなす雑務クエスト、そしてそれ以外の特殊クエストがあります」

「受けたクエストの種類によって評価が変わることはない？」

「基本的には無いです。  
ギルドからの評価は全てランクなので

「ふーん・・・」

なるほど、当たり前だが働けば働くほど評価が良くなるのか。

「続けますね。

次はクエストについて説明します。

クエストは主に市民がギルドに依頼をすることで発生します。発生したクエストはギルドの判断によってランク付けされ、

そのランクのハンターがギルドに来た時に、優先的に回されます。ハンターはクエストを受けると、

そのクエストを絶対に達成しなければいけないという義務が発生します。

クエストの報酬は依頼人の前払いギルドが預かっており、ギルドからクエストの達成に成功したハンターに渡されます。どうしてもクエストを達成できないハンターは、そのクエストを他の人に回すことでそのクエストをやらなくて済みます。ただしペナルティが存在し、クエストが達成できなかつたハンターは、

そのクエストの報酬分のニルをギルドに支払わなければなりません

ん

失敗したら逆にお金を払わなきゃならんのか・・・

「あと、ギルドは採取品の回収も行っています。

モンスターの牙や爪など、そういうものをニルに換金します。討伐クエストの中にはそういうモンスターの部位を持つてこないといと

達成したことにならないクエストもござりますので注意してください

また、魔結晶の回収も行っています

「魔結晶？」

「魔結晶とは、モンスターが体内で作り出す魔力で出来た結晶で、魔力を発しています。

街の街灯など魔力で動いているものの燃料となるのがこれです。これも持つてきたださればその大きさと数によってお金に代えさせていただきます」

「ふむ・・・」

「RPGでこ'うモンスターを倒したときのギルの代わりか・・・

「ギルドについては以上です。何か他に質問は?」

「いや、特にないです」

「わうですか、ではこれからハンター登録に入りたいと思つります。まずはこの紙にサインしてください」

「はい」

ふむふむ・・・誓約文とな・・・

1、負傷や死については自己責任です

・・・いや確かに大事かもしれないが、最初に持つてくれるか?普通・・・

以上の事を了承し、ハンター登録をします。

「え、こんだけ!?」

「どうされました?」

「ああいや、なんでもないです」

まさかこれだけとは・・・

「はい、書けました」

「・・・レン・クロハ様ですね、ではこちらでどうぞ」

そう言われて俺は、カウンターの中に連れられていった。

・・・

「こちらの部屋に入つてください」

案内された部屋の中には水晶があつた・・・水晶？

「これからクロハ様の適性と能力をはかります」

「適性については知つていますが能力とは？」

「能力とはその人の力をランク付けしたもので、

筋力、魔力、耐久、精神、敏捷、幸運の6つをはかります。

ランクは下から、F、E、D、C、B、A、Sと上がつていきます。最高はSです。

また、ランクの中にも上下があり、そのランクの平均より高ければ+が、低ければ-がつきます。

ただしこのランクはあくまでも目安としての判断基準なので、過信はしないでください」

「はい」

そりやランクひとつで人の価値が決まればたまつたもんじやないよ  
な・・・

「以上で説明を終わりますが何か質問は？」

「いえ」

「ではこの水晶に手を触れてください。そちらの壁に水晶から光が  
照らわれ、結果がでます」

「はい」

そうして俺は水晶に手を触れる。

「しばらく待つてください。結果が出るまで少し時間がかかります」

・・・

手を触れてから5分くらいたった後、水晶から光が壁に向かって伸びた。

「結果が出たようですね・・・これはすごい」

受付のお姉さんが手のひらを口元にもつていて驚いている。

「そんなにすごいんですか？」

「ええ、まず能力からですが、

筋力がB?、魔力がA、耐久がC?、精神がA?、敏捷がA、幸運がD?。

・・・幸運以外は世界でも有数のランクですね」

「そこまでですか？」

「ええ、例として挙げますと、この世界の一般的なヒトの男性の能力が、

筋力E、魔力E?、耐久E、精神F?、敏捷E?、幸運E?です。  
・・・あらためて比べるとすごいですねあなたの能力」

「マジか・・・」

たしかにあんなモンスターを倒せたんだから結構高いだろ?と思つたけど・・・まさかそこまでとは。

「で、適性の方は・・・火B、水S、氷C、地C、雷S、風A・・・なんですかこの適性」

「たかっ!?」

「S!一いつて・・・とんでもないですねあなた・・・しかも光と闇もAありますし・・・」

「うええ・・・確かに魔法は使えてえけどこんな高い適性はいらねえよ・・・  
ぜつてえ田立つじやねえか・・・

「しかもじつやうギフトがあるみたいですね・・・

「ギフト?」

「ときどき持っている人がいるんですが・・・  
ギフトとは生まれ持った才能という意味で、これを持っている人は能力に補正がついたりある属性の魔法を使うのが得意になつたりと様々な効果がつくんですよ。

あなたのギフトは・・・「神の加護」？

・・・もしかしてそれってこの体が神に作られたから・・・ってことじゃないよな。

「効果は全能力1ランクアップと、全ての属性の適性が3ランクアップする、というものみたいですね」

・・・え？ んじゃなに、俺の適性が高いのは神が体を作ったからってことか？

・・・今度会つたらぜつてえ殺す

「ふおふおふおふお」と老人の笑い声が聞こえた気がした・・・  
「しかしやっぱいな・・・これをお偉いさんに知られるわけにはいかねえぞ・・・」

確かミリヤは1ランクの適性を持つ魔道士は歴史に乗っている人ばかりだと言つた・・・  
そのランクを俺は2つも持つちまつてる。  
もしこれが偉い人に知られたらまず間違いなく利用しようとするだろうな・・・

「冗談じゃねえぞ・・・利用なんてされてたまるか・・・」

・・・もともと俺は田立ちたい性格ではないけれど、れじやあ田立ちたくても田立てんな。

「しかしれじやあへタに動けんな・・・よく考えて動かんと・・・

「

そう俺がこれからのことについて考えてみると・・・

「あ、あのー、聞いてます?」

「あ・・・

お姉さんのこと忘れてた・・・

・・・

その後俺は部屋から出てカウンターの前で待つよう言われた。

「まあどうあえずは普通にしてて大丈夫だろ、近くに偉い人が来ない限り普通にしてよう」

ビクビクしてると帰つて怪しまれそうだしな

「お待たせしました、これがギルドカードです」

そういうお姉さんは俺に金属できたカードを渡した。

「そのギルドカードはあなたがハンターであると証明するものです。ギルドの施設を利用するにはからずそのギルドカードが必要に

なつますので

必ずなくさないようこしてください。もしなくしてしまつた場合は再発行しますが、

再発行には銀貨10枚が必要です

「わかりました」

「ギルドカードには所有者の名前とハンターランク、一つ名が存在する場合は二つ名が記入されます。

全て間違いないですか？」

確認すると、レン・クロハ H R G と書かれている。

「間違いないです」

「ではこれでハンター登録は終了です。すぐにクエストを受けられますがどうしますか？」

「・・・どんなクエストがあるか見せてください」

「はい、こちらが一覧となっています」

そうこうで手渡された神にはいくつかのクエストがのつていた。

ゴブリン討伐クエストや花見草採取クエストなどがある。

「このゴブリン討伐とこののは？」

「これはですね、最近ゴブリンがこの近くで大量発生しています、その数を減らしてもらうために

ギルドから出されたクエストです。

「ゴブリンは小さなモンスターで、一匹一匹は弱いのですが、群れをなしてることが多いので油断すると困まれています」

「ふむ……」「ゴブリン5体の討伐、証拠としてゴブリンの右耳5つの回収ね……」

「んじやこれを受けよう」

「はー、取締しました」

「やのゴブリンせどりしてみたんだ?」

「ゴブリンは街の外に出ねば死ににでもいますから……」

「一番田撃情報が多いのはこの街の南東側でしょうから

「ん、ありがと。んじや行ってくる」

「お気をつけ」

「俺はお姉さんに一礼すると、ギルドの外に出で街の南出口を指して歩き始めた。

## 第七話 ギルド（後書き）

ははははは、どうだ黒君、私の強化つぱりは！

黒「有難迷惑じやボケが——つ！——！」

くほせめい!!

仕方ないじゃないか。たって強くしたか。たんだから

黒一しくなんても限度があるたゞ一か！」

「…でもなー…・・・体の方はそんなに手を加えてないんだそ…全能力1段階アップしただけだし・・・

黒一・・・まあたしかにそうかもしけんか、適性の方はどう説明す  
る?」

いやー魔法使わせてみたいじゃん?

黑  
· · ·  
終焉は刹那  
· · ·

ちよお!? それは無しだ! 冗談抜きで死ねる!

黑 - 511

ふしーあふねえ・・・

黒「つか結局現世の神!! 作者なのか?」

いやどうだ？

黒「わからぬのかよ・・・」

そちらへんも構想中、まあとまあず今口せりまでは

黒「わかつた」

それではみなさん！

相変わらずの駄文ですが読んでいただきありがとうござます！

黒「頑張って書いて行くのでどうぞよろしくお願いします」

それでは！

黒「また今度！」

## 第八話 はじめてのクエスト（前書き）

第八話 はじめてのクエストです

この話は最初は次の話と一つだったんですが、あまりにも長くなってしまったので

途中で切ることにしました。

そのため今回の話にはあとがきがありません。  
そこを「」のうえ読み進めてください。

それではどうぞ

## 第八話 はじめてのクヒスト

南門から外に出た俺は、「ゴブリンを探して南東方向へ進み始めた。

「しつかしゴブリンかー、  
ファンタジーのモンスターの代名詞つて感じのモンスターだけ  
どんなんだろなー」

そんなことを言いつつ街の外を散策する。

街の南側は山に囲まれていて、このまま山を登ると達り国に出てしまつらしい。

「なんて言う国だっけ・・・ル・・・ル・・・  
ルクセンブルク?・・・それはヨーロッパの国だろ俺・・・」

自分に突っ込みながらあたりを見回していると、

「おつと、出たか?」

少し先にモンスターたちの群れがあった。

「んー・・・長い耳に醜悪な外見をした小さな一本足で立つモンス  
ター・・・あいつらだな」

ギルドで見たゴブリンの絵にそっくりだった。

「んじゃあ、まあ・・・ゴブリン退治と行きますか

・・・

最初はまだ気付かれていないので、魔法での攻撃で奇襲し、混乱を誘う。

「よし・・・ 来たれ雷の精霊たちよ 槍となりて敵を穿て プラズマランサー！」

俺の周りに4本の雷で出来た槍が浮遊し、ゴブリンの群れに向かって放たれる。

「ギィヤヤヤヤヤヤー！」

その内の2本がゴブリンに当たり、悲鳴を上げて倒れる。

「んー・・・ まだ完全には制御できないか・・・うし、次

ゴブリン達が俺に気づき、一ちらへ近づいてくる前に次の魔法を放つ。

「 来たれ氷の精霊たちよ 槍となりて敵を穿て フリーズランサー！」

この魔法はプラズマランサーの氷属性Veryな感じで、氷でできた槍が敵に向かって飛んでいく魔法だ。

グサグサツ

「ギャアアアアア！」

先ほどよりも本数を減らして2本だけにして、制御に集中すると、どちらの槍もゴブリンに命中させることができた。

「ふむ……やはり意識の分散を少なべると制御しやすいか……」

残りのゴブリンは3体。もう魔法を唱える時間はないが……

「ふつ（ブウンッ）」

・・・詠唱無じでプラズマソードを作り出すことができた。

「2回発動して充分イメージができあがつたからたぶん行けると思つたが……

やつぱりイメージを強くすれば無詠唱でも発動できたか

俺が試したのは無詠唱でのプラズマソードの発動。

敵が襲つて来るときは詠唱している暇がない時がある。

そういうときのために練習しておきたかったんだが……

どうやら雷属性のは伊達ではないようだ、一発で成功してしまつた。

「ま、成功して駄目なことはないしこんだけじね……さて、いきますか」

もうすぐそこまでゴブリンは迫つてきている。

「・・・せつ

「ギャッ！」

「まづまー一番早く俺の近くにきた、ゴブリンを斬る。

「ふつ・・・・・」

「ギュウッー！」

斬つた勢いのまま右側にいたゴブリンに駆け、すれちがこざまに切り抜ける。

「ギヤギヤツー・・・ギヤギヤギヤギヤツー・・・

最後の1匹は仲間がいなくなつたのに恐怖したのか逃げだそつとした。

確かに1匹で勝てない相手に1匹で戦いを挑むのは愚の骨頂だ・・・  
だがな、

「もう遅え・・・逃がさねえよ・・・・・！」

プラズマソードに魔力を注ぎ込む・・・・・

「不動黒羽流 斬空刃・雷ー！」

俺が振りぬいたプラズマソードから出た斬撃はあつとこつ間にゴブリンに追いつき、

「・・・・・」

「ゴブリンに悲鳴を上げさせぬ」ともなく真つ一いつした。

・・・

俺は倒したゴブリンを一か所に集めて、倒した証拠となる耳と体内にあるといわれる魔結晶をとつだそつとしたんだが・・・

「・・・どうせつて取ればいいんだ?」

そう、俺は解体用の道具も、ましてやナイフも持っていない。

「プラズマランサーなんかで切つたら耳が焼け焦げるだらうしな・・・

「・・・と齒んでこると、

「あ、そうだ、電気じゃなきゃこいんだ

そつとつて、俺は右手に魔力を集める。

「・・・魔力の構成はプラズマソードと同じで、属性だけ氷に変え  
る・・・!」

そつやつて右手の魔力を少しづつ氷に変換していくと・・・

「・・・おお、できた

多少形はいびつだがなんとか肉くらいなら切れそつな氷の剣ができるた。

「プラズマソードが電撃を発するから氷氣でも発したりビリビリかと思つたが……」

やはり詠唱無しで魔法を使つとこりのまは無茶があるらし。魔法が発動しても構成が甘く、どこかおかしい結果になるみたいだ。

「まあそのおかげで解体作業ができるんだがな……詰づけてフリーズナイフってか？」

そんなことを言いながら俺はゴブリンの解体作業に入った。

・・・

「んー、魔結晶があつたのは2体だけか・・・」

どのゴブリンも細かく解体して魔結晶を見つけようとしたが、結局あつたのは2つだけで、どのゴブリンにもあるわけではなかつた。

「まああつた魔結晶は同じ場所にあつたから

たぶん次からなに時間かけることもなこと思つが・・・  
出てきた2つはどちらもゴブリンの心臓の部分で、どうやらモンスターは、心臓の近くに魔結晶を生み出すことがわかつた。

「・・・うし、ゴブリン討伐完了。後はギルドに持つて行くだけだ

ゴブリンの耳もはぎ取り、後はギルドに行くだけだと街に向かって歩き始めた。

「しかし魔法はもうちょい練習しないと使い物にならんな……」

今回の戦いでは「ゴブリン」という弱いモンスターだったから一撃で絶命させることができたが、どうやら俺の魔法はそこまで威力が高いわけではないようだ。

「かといって威力を増やそうとして魔力を多く使えば制御しへべくなるし……」

実は最初に使ったプラズマランサーは4本の槍を生み出していたが、俺は槍を生み出した時点ですでに制御しきれておらず、全力でゴブリンの方向に意識を向かわせることで、やつと放つ事が出来ていた。

「戦場で全ての意識を一方に向けるのは自殺行為だしな……」  
ただ後方で魔法を放つ砲台スタイルならそれでもいいかもしかんが・

「俺の本業は剣を使った近接戦。とても意識を一つの方向に向ける余裕はない」

と考えると・・・近接戦では魔法は牽制用と割り切るか？

「無詠唱で2本くらい槍を生み出しつとばせば牽制くらいにはなるだろ」

となると今後の課題は魔力の制御とイメージを深めることだな。

「無詠唱で魔法を作り出したついでそれを完璧にコントロールする。  
まずはそれを田舎すとするか」

俺はそういった今後の課題を考えながら街に向かって歩いた・・・

・・・

街にたどり着いた俺は、クエストを達成した報告と魔結晶の換金のために、  
まずギルドへ向かった。

「すいません、クエストの達成を報告したいんですが・・・

話しかけたのはさきほど話を聞いたお姉さんだ。

「はいわかりました・・・つてさつきの人じゃないですか

「ええ」

「もう討伐してきたんですね？」

「弱かつたですし、すぐに見つかりましたしね。案外早く終わりましたよ」

「そうですか・・・はじめてのクエストですし、正式な流れでクエスト報告を行いましょうか？」

「ええ、それでお願いします」

次も同じ人とは限らないし、」」でしつかり練習しておおか・・・

「はい、ではまずあなたが受諾したクエストを教えてください」

「アランク、ゴブリン討伐クエスト、討伐数5です」

「・・・アランクのゴブリン討伐クエストを受けたクロハ様ですね？」

「はい」

「ではアランクの耳をだしてください」

俺は街の外で捨てられていた布に包んでおいたゴブリンの耳を出した。

「はい、確認しました。あまりの耳も一緒に処分しますがよろしくでしょうか？」

「はい、お願ひします。あと魔結晶の換金もお願ひします

「わかりました、少々お待ください」

受付のお姉さんは渡した魔結晶を持ってカウンターの奥へ行つた。

「・・・はい、クエスト達成分の報酬と、小魔結晶2つ分をあわせた報酬、300一ルです」

そうこうでお姉さんは銀貨を三枚俺に渡した。

確かにゴブリン討伐の報酬が200一ルだったから小魔結晶1つで50一ルか・・・

小魔結晶といつへりいなんだ。おそらく大きさで値段が変わるんだろ。

「ありがとうございます」

「それではこれでゴブリン討伐任務は終了です。クエストの流れは理解できましたか?」

「ああ、よくわかった」

「やつですか、それはなによりです・・・まだ時間もありますし他のクエストも受けますか?」

「ああ、やつするよ」

「ではクエスト一覧より受諾するクエストを選んでください」

「えつと・・・これとこれとこれと・・・」

結局俺はそのあと、4つのクエストを受諾した。

・・・

「んー 結構稼げたな・・・」

その日のつりの全てのクエストを達成して、俺は合計で1600一ル手にすることことができた。

「//このヤバい話はもうと確か1000一ルで一回もひせんんだよな

「一ひととまじれだけあれば今日の宿は確保できるか・・・

「それで、空も暗くなってきたことだ。どうか泊まる宿をさがすとい  
うか

「さういひ俺は今晚の宿を探して街へ出かけていった・・・

・・・

## 第九話 宿屋の娘（前書き）

第八話の続きです。

後半の方が半寝の状態で書いたのでわけがわからなくなっています・・

それでもよろしい方はどうぞお読みください。

それではどうぞ

## 第九話 宿屋の娘

「……どの宿にすればいいんだ?」

俺がやつてきたのは街の北の一角にある宿が集まっているエリアなんだが……

「右も左も宿、宿、宿、宿……宿ばっかだな」

さて、今俺がすべきことはいかに安くて心地よく寝るかなどができる宿を見つけることだ。

「ついつい他の宿も同じように見てみたが、見えるんだよな……」

どの宿も木製の2階建てで似たような建物だ……

「……お、いいよくなっ?」

俺がみつけたのは宿屋が並んでいる通りから少し離れた場所にある宿屋で、他の建物の陰に隠れて少し見づらくなっている宿屋だ。

「なんだか俺の直感がここがいいと言っている気がする……」

まあどの宿屋でも同じだしここも直感に従つてみるか……

「お、値段表だ……一泊朝夕二食付きで7000円……安くね?」

他の宿は「泊朝夕」飯付きで1200～1500一ルだったのに対してここはその半分程度・・・

「・・・いいとこみつけたな」

俺は少しいい気分になつてその宿屋に入つて行つた。

・・・

「こんばんはー」

建物の中は少し古くなつた小さな宿、つて感じで、いい雰囲気を出していた。

「はーい！」

そう言って俺を迎えてくれたのは、三つやよつも少し年上な感じのオレンジの髪の女の子だった。

「えー、一泊泊まりたいんですけど」

「はーいーーー名様で一泊されるんですね？」

「はーい」

「かしこまつましたー料金先払いです700一ルになりますー」

俺はポケットから銀貨7枚を取り出して女子に渡す。

「・・・はーい、ピッタリお預かりしました！」

それではさつ もくお部屋の方へ案内させていただきまゝで着いてきてください！」

そう言つて女の子は奥にあつた階段を登つていぐ。

「・・・元気な女の子だな」

俺は苦笑しつつ女の子の後をついて行った。

・・・

「「」お客様にお休みいただく部屋になりますー。」

案内された部屋は一部屋にベットだけがある簡素な物だった。

「もうすぐタ」飯の時間なのですが、どうで食べられますか？」

「「」でも食べられるのかい？」

「は」」下のホールで食べられるか部屋で食べられるかお好き」どういふだ？」

「もうだな・・・」

別に部屋で一人で食べてもいいんだが・・・

「・・・なあ、「」君一人で経営してゐのかい？」

ふと、そんなことを聞いてみた。

「あー・・・えつとですね、親が死んじやつたのでその後を引きついで私一人で経営しています」

「そつか・・・」

「やつぱりな・・・

この宿からはこの少女以外の気配が全くと黙つていいほどない。だから親とか従業員とかそういうた本来いるべき人がいないのが気になつたんだが・・・

「えと・・・やつぱり泊まるのやめますか・・・?」

「いや、やめないけど・・・なんで?」

「どうしてそんなことを言つんだ・・・?」

「だ、だつて私なんかが一人で経営してるんですよ?  
此処に来たお客さん全員が私一人だと知つたらすぐに泊まるのをやめるんですよ・・・?」

・・・そつか、この子は怖いのか。

お客さんに逃げられても一人で経営するしかなくて、それでやつてきたお客さんにも逃げられて・・・

・・・そりや怖いわな、来たお客さんがほとんどいなくなるんだもの。

「心配すんな、別にやめな」よ

「え・・・？」

「此処に泊まると。いい宿じゃないか、かわいい女の子に泊まら  
れるんだ。

「これ以上の贅沢はないだろ？」

「・・・「うえ、えい、い、い、」

「あよーへじうして泣くー。」

「お、おこ、じうた、なんで泣こてるんだー？」

「だ、だつて、私、この宿をつこでから、はじめて泊まつてくれる  
お宿やんて・・・」

「ああ、もう泣くなつての・・・」

「俺、この世界に来てから女の子の涙を見るのがきね・・・？」

「ぐすり、ありがとね・・・」

「はこはこ、じうこたしまして。」

「んじやもうすぐ飯の時間なんだろ？ 楽しみにしてるから作つてく  
れないか？」

「ぐすり、はい。誠心誠意をこめて作りたいと思こまつー。」

「こや、もしもでまつりなくしてこいんだがー・・・」

「それでは行つてきますねー。」

「ああ、ちょっと待つた！」

「はい？なんですか？」

「食べる場所なんだがさ、下のフロアにあるよ」

「あ、そういうふうなのがありましたね、うっかり忘れてました・・・」

・

「んじゅ頼むよ」

「はい・」

・

下のフロアで待つことに30分ほど・・・

「できましたー・・・」

「おおひー・」

「今日の料理はベクンビーフのステーキとスレサリアのソテー、そしてポーンスープとマイドですー！」

並べられている料理を現世の料理に例えると、ベクンビーフのステーキは牛のステーキ、

スレサリアのソテーはほつれん草のソテー、ポーンスープが「ーン  
スープな感じである。そして・・・

「米があるのか！」

俺が驚いたのは「」の世界にも米があつたことである。

「米・・・とはマイのの事ですか？」

「ああ！俺が住んでたど」「」ではそのマイを米とよんでいたんだ！

「そりなんですか・・・」のマイはルクセリア共和国産のもので大  
変おいしいんですよ。」

そんな説明が入る。

「それでまびうれタ！」飯をお皿じ上がりくださー！

そつ言つて女の方は厨房に戻るつとする・・・

「ああ、ちょっと待つて」

「はー？」

「今日他にお客さんいる？」

「いえ、こまさんだけ・・・」

「えじや！」の後は自分の「」飯をたべるだけ？

「えっと、やつですか～～～」

そつか・・・なら。

「えじや一緒に食べないか～～～も一人で食べるのはやみしこんだ」

そう言つて夕飯に誘つた。

「え・・・いいんですか～～～」

「ああ、俺はかまわないんだけど・・・」

「えっと、じゃあ」一緒に食せてもいいもんこでしょつか

「ああ、一緒に食べよ」

「じやあ私の分の」飯をとつてきますね～～

そうついてこの子は厨房に走つて行つた。

「・・・ふつ・・・慣れないことをするもえじやない・・・」

女の子を「飯に誘つとかど」のキザ野郎だよ・・・

「でもなあ・・・あの子が最初に厨房に戻つとした時の皿を見るとな・・・」

あの時あの子は笑顔を浮かべていたんだが、  
よく皿を見ると少し悲しみの色が浮かんでたんだよな・・・

「・・・あんな皿みたらほつとけねーよ・・・  
まあ誘つたことで悲しみがとれたからいいんだがな・・・」

自分の食事を取りに行つた時あの子の皿には悲しみの色は見えなかつた。

「あー・・・でももつと他に言い方があつたんじゃねーのかー!?

俺は彼女が帰つてくるまで自分の発言にもだえ苦しんでいた・・・

・・・

「お待たせしました!・・・あれ? どうしました?」

「いや、なんでもないよ・・・せやく食べよつぜ?」

「あ、はい!」

女の子が俺とは反対側の席に座る。

「それでは食べるといしますか! いただきます!」

「いただきます?」

「あーっとな、いただきますつてのは俺が住んでいた所の言葉で食  
材や料理を作つてくれた人への感謝 の気持ちを表す言葉なんだ」

「そりなんですか・・・」

「それよつも早く食べよつぜ?」

「そうですね

俺たちは料理を口に入れた・・・

「うめえー」んなにうまい料理を食べたのは久しぶりだ!」

「そ、そんなことないですよ、まだまだ練習不足ですし・・・」

「いや、俺が保証するよ、この料理は間違いなくうまい

「や、やりますか・・・ありがとうございます」

異世界に来てから口クなもん食べてなかつたからなあ・・・

「・・・やういえば名前ってなんていうんだ?」

ふと聞いてみた。

「えっと、私はリタってこります」

「くえ・・・リタか・・・いい名前だな」

「あ、あいがと」わざわざ

少し頬を染めてうつむいてくる・・・変なの。

「えっと、あなたはなんて名前ですか?」

「俺の名前はレンだよ」

「レンですか……えつと、レンへんつて呼んでいいですか？」

「ああ、なんでもかまわなによ」

自分の名前をいつとあはな前だけ名乗ることにした。  
この世界では名字があるのは貴族や王族だけで一般市民は名字がないからだ。

だつたらこつもせながはな乗らない方がいいと判断した。

・・・

「・・・ル・ル・ル・ル・ル・ル・ル・ル・ルの出身なんですか？」

リタと会話をしながら食事をすすめていくと、リタがそんなことを聞いて来た。

「じつした？急に」

「えつと・・・・・レン君と話してると時々知らない言葉が出てきますし、

それに服が「」の近くでは見たことがないよつなつくなつてふと氣になつて・・・」

・・・ル・ル・ル・ル・ル・ル・ル・ル・ル・ルの高校の制服だつて。

「えつとな、俺の出身は」の大陸じやないんだ」

「え？ そつなんですか？ じゃあゼクンティウスの出身なんですか？」

「いや違つよ」

「え？ それじゃあアルカティアから来たんですか！？」

「残念、それも間違いだ」

「え？ じゃあどこのから来たんですか・・・？」

「えつとな、俺が住んでいたのはここからはずつと東の方へいった所にある島だよ」

「へえー！ そんなところがあるんですね？」

「ああ」

「これもギルドの仕事をしているときに考えたことだ。  
これと転移魔法の事故を合わせればまあ怪しまれんだろ。」

「どうなんですか・・・」

「ああ。普通に歩いていたら近くで発動した転移魔法に巻き込まれて気がついたらこの近くにいたんだ」

「へえー・・・大変だったんですね」

「ああ、大変だった。何も持っていない時にいきなり知らないところに飛ばされたんだぜ？」

「よくこの街に着いたと思つよ・・・」

・・・その間にお姫様を助けた事は内緒だ。

「大変ですね・・・おかわりいります?」

「ああ、頼むよ」

俺はリタに皿を渡しておかわりを持つてもらつた。

・・・

食事も終わりリタに俺の事を話したり、この街の事を聞いたりしていると、

突然リタがしゃべるのをやめて黙ってしまった。

「・・・どうした?」

「いえ・・・こんな風に誰かと楽しくおしゃべりするのはほんとこ久しづりで・・・」

「え?」

・・・リタは少し黙るとぱつぱつと自分のことを話し始めた。

「・・・半年前に親が死んでから私はずっとひとりだつたんですね」

「え、友達とかはいなかつたのか?」

「親がいるときはいました・・・けど親が死んで少しだつとだんだん皆いなくなつていつて・・・」

そしてある時から私の周りには誰もいなくなりました

「どうして？」

「わかりません……一人で宿の仕事をするのが忙しくて話に行くこともできませんでしたし……その内一人でいるのが当たり前だと思うようになりましたので余裕ができてからも宿の外に出ることが少くなりましたから……」

「……寂しくはなかつたのか？」

「どうでしょうね……

親が死んでからしばらくは一人でいるときに寂しくて泣いてしまう事もありましたし、

親がいたときのことを夢見てもう一度楽しい日々をすゞしたいなと思ったこともありますたけど……

最近は一人でいることに慣れましたからむづそんなことはなくなりましたね」

そういうて微笑を浮かべるリタ。

「……無理して笑わなくていいって、寂しいんだろ？」

「え……？」

「笑顔が固いんだよ、作られたみたいにな」

リタが浮かべた笑顔はあきらめ混じりの笑顔で、誰かとすこすことをあきらめているようだった。

「一人が寂しいんだろ？」

「そんなこと……！」

「いーや寂しいね、俺にはわかる」

「……あなたに、あなたに何がわかるんですか！？」

そういうてリタは椅子から立ち上がった。

「寂しいですよ！当たり前じゃないですか！ずっとずっと一人ぼっちで……悲しいに決まってるじゃないですか！」

そう叫んだリタの頬には涙が流れていた。

「だけど仕方がないじゃないですか……！」

友達だと思っていた人は皆いなくななりました！話しかけても逃げられる！近所の人には気の毒そうな目を向けられる！

逃げられるのも、同情されるのももうまっぴらです！……  
そんなことされるくらいなら一人で宿屋に閉じこもった方がいいんですよ……」

そう言つてリタは手で顔を抑えて座り込んだ。

「……それが本音か」

「ええ、そうですよ……満足ですか？聞きます」

あ、今のは力チンと来た。

「……ふざっけんじゃねえよ……」

「ひやー？」

「逃げられるのが嫌だ？同情されるのはまっぴらだ？そんなことわ  
れるなら一人でいた方がマシだ？」

甘えてんじゃねえよー。」

「・・・甘えてなんか、甘えてなんかいませんよー仕方がないじゃ  
ないですかー？」

私には何も思いつきませんでした！

友達との仲を元に戻す方法も、同情の目を向けられるのことをなく  
すことモー。」

「それが甘えてるって言つてるんだよー何も思いつかないだあ？  
ふざけんなー！だつたら思いつくまで考えろよー。」

リタの考えは俺が一番嫌いなものだ。

どうにもできない、じゅあ諦めましょー。ふざけんなーの・・・

「何も出来ないからつて閉じこもつて何かが変わるのかよー。  
世の中そんなに甘くはできてねえ、最後まであがいた奴が幸せにな  
れんだよー！」

「寂しいんだろ？悲しいんだろ？一人でいるのが嫌だつたんだろ？」

「そんな簡単にあがくのをやめんじゃねーよー。」

「もしかしたらすぐ近くに幸せはあるかも知れないんだー！」

「もつー回あがいてみるよーリター。」

そう、俺は言い放った。

「……一人であがいたって何も変わりはしませんよ」

「じゃあおれも一緒にあがいてやるよ」

「え……？」

「言つだけ言つて自分はやらないつていつのも俺が嫌いなことだ。

「一人でだめなら一人で、だ。

一人ではダメでも一人なら何か変わるかもしねえ、そうだろ？」

「……一人なら変われますか？」

「俺はそう信じてる」

「もう一度楽しい日々を夢見ていいんですか……？」

「そんなものはそもそも捨てちゃいけないと毎日

「……手伝ってくれるんですか？」

「ああ、お前がまた幸せに過ごせるようになるまで手伝ってやる」

「ううつて俺はリタに手を差し出す。

「だからもう一度頑張ってみるよ、リタ」

「お前がもう一度頑張るって言つながらこの手を取れ、そうじゃ俺は

お前を全力で手伝つてやる

「・・・」

リタは俺の手をじっと見つめる。

「・・・じゅあ

「じゅあもう一度だけ頑張つてみます」

「あの時夢見た幸せな日々を現実にするために・・・

「だからレン君、手伝つてくれださー」

そうこうでリタは俺の手を取つた。

「ああー」

「・・・ありがとう、レン君・・・」

リタは俺の手を握つたまま涙を流していた・・・

・・・

あの後俺はリタに寝るよひに伝え、自分の部屋に戻つてきた

「ふつ・・・この世界に来てから女の子のことに巻き込まれるのが  
多くねえか俺?・・・」

この世界に来てまだ3日で一人の事に巻き込まれるって・・・

「まあそれは置いておけ。とつあんず今はリタのことだ」

リタの問題は解決が難しい・・・

「セツキはあんな事言つちまつたけど具体的にどうやらいいのかはわからんねえな・・・」

近所の人の同情の目をなくして普通にリタに接しさせる。なぜリタの友達がいなくなつたのかを調べてリタの友達を増やす。「どうちも難しいな・・・同情の目を無くすつじどうすつやいいんだ?」

「あー・・・駄目だ、睡魔がやばくて考えが纏まらねえ・・・

久しぶりにまともなベットで睡魔がやべえ・・・

「じょうがねえ、とりあえず寝るか・・・」

俺は睡魔に降伏宣言をあげてる。

「おやすみ・・・」

「おやすみ・・・」

## 第九話 宿屋の娘（後書き）

・・・はい、とにかくことで第九話 宿屋の娘でした。

ながかつた・・・やつと寝られる・・・

・・・他のキャラがみんな寝てるのでこれで終わりますね。

それではみなさん、またこんど・・・

・・・ZZZZZ

1月9日、後半部分を大幅に修正しました。

寝て起きて見直してみたら後半の無茶苦茶にびっくりしたもので・・・

・

以下、追加のあとがき

黒「・・・あれ？俺ってあんな熱血キャラだっけ？」

いやー、最初は静かにリタをなだめようと思つてたんだけど  
書いてる途中でだんだん楽しくなつちゃつて・・・  
まあ後悔はしていないけど

黒「しるよー」

やだねー、楽しかったんだから問題ないわ

黒「お前は楽しくても評価するのは読者なんだよーっていうか元と

変わりすゞじやね？後半」

いやー、眠い中なんとか仕上げて投稿したのをあらためて読んだら  
アルエー  
な出来だったもんで。

黒「まあ確かに元のは変だつたが……それにしても変わりすぎだ  
る」

まあ元の小説を読んでくださった読者様には申し訳ないけどね……

黒「……読んでくれてる人いるのか？この小説」

グハッ……い、痛いところを……いいんだよ！俺がいると思つ  
てるんだからいるんだよ！

黒「なんという暴論……そこに痺れない憧れない」

黙つとけ！……まつたく……それではみなさん、こんな駄小説  
を読んでいただきありがと「ひ」れいます。

黒「大分長くなつてしましましたがここで終わりたいと思います」

それでは！

黒「また今度ー！」

## 第十話 怒りと決意（前書き）

設定集を書くか書かないか迷っています・・・  
設定集があつたほうがいいんでしょうかね？

はい、とこりわけで第十話 怒りと決意です。  
いつもの如く駄文ですがそれでもよろしいかたはお進みください。

それでははじめます。

## 第十話 怒りと決意

チュン、チュチュン、チュン

「・・・ん、朝か・・・」

鳥のさえずりと朝の日差しで俺は目覚めた。

「んんっ・・・」

大きく伸びをしながら体の調子を確認する。

「・・・ひし、魔力ももどりてるし万全そのものだな」

昨日消費した魔力は全体から見れば微々たるものだが、やっぱり回復していればうれしいものである。

ガチャッ

「レン君、おはようございます」

扉を開けてリタが入ってきた。

「ああ、おはよう」

「朝はんの用意ができていますので準備ができたら下に降りてきてください」

「ああ、わかった

「それでは

「いつまでもリタは部屋から出て行つた。

「・・・準備つづたつて別に何もないしな・・・行くか

俺もその後に続いて部屋から歩き出した。

・・・

朝食後、これから仕事をリタと話しあつてていた。

「それでレン君、具体的にはどうするんですか?」

「とりあえずギルドの仕事をしながら色々話を聞いてみたいと思つ

「ギルドの仕事ですか?」

「ああ、今は収入がそれしかないからね。初めは一泊だけのつもり  
だつたから稼がないとここに泊まれないし」

「そりなんですか・・・別にお金払わなくともかまいませんよ?一  
人も一人も変わりませんし」

「・・・その台詞は経営者としてはどうかと思つや?まあいいから  
気にすんなつて。どうせ金はいるんだし」

武器を買つたとしても宿屋に泊るにしても金がいるしな・・・

「まあそういうことで今日はギルドに行つて来る

「わかりました。もつ出るんですか？」

「ああ、早いうちから言った方が仕事をする時間が多く取れるしね。  
とこつわけで行つてくわ

「はい、お気をつけで」

俺はリタに見送られてギルドに向かつた・・・

・・・

「すいません。ギルドの仕事を受けたいのですが・・・」

「はいわかりました・・・つて昨日のハンターさんじゃないですか

「あれ、昨日のお姉さん?..よく覚えますよ・・・」

「あの能力を見たら嫌でも覚えますよ・・・」

「あ、あはは・・・」

まあそろかもしれんな・・・

「で、ギルドの仕事をしたね?では、ギルドカードを提出してくわ  
い」

「はい

カウンターの上にギルドカードを置く。

「レン様ですね。ではこちらのクエストからお好きな物をお選びください」

「んじゃあ「れと」「れと」「れと」「れと」「れと」「れと」

「い、5つもですか・・・?」

「ええ」

「わ、わかりました。・・・」この5つのクエストですね

「はい」

「ではよろしくお願ひします」

「んじゃ行つてきます」

そう言つて俺はギルドから外に出て行つた。

・・・

「・・・ 来たれ氷の精靈よ 槍となりて敵を穿て フリーズラン  
サー！」

ギィヤヤヤヤヤヤヤ・・・

「これで討伐のクエストはおしまひと

今日受けた5つのクエストは3つが討伐のクエストで、残りの2つが採取クエストだった。

「ゴブリン5体とウルフ3体とビー8体の討伐か、案外早く済んでよかつた」

ウルフは小型のオオカミのようなモンスターでゴブリンと同じく集団行動を好み、

1体1体は大したことはないが、大型のウルフの上位種、ベルウルフがリーダーとなつて群れを率いている場合は注意が必要らしい。ベルウルフが仲間に指示を出し、連携して襲つてくるからだそうだ。

「今回見つけたウルフの群れにはいなかつたがな・・・」

そしてビーは、ヒトの顔ぐらいの大きさの巨大な蜂のようなモンスターで、

針には神経性の毒があるらしい。・・・わかりにくい人は某狩猟ゲームの某モンスターを思い浮かべてくれればそれで大体あつている。

「あの野郎・・・ブンブンブンブン飛び回りやがつて・・・全然当たんなかつたじやねえかよ・・・」

こちらが斬ろうと瞬間に上空に飛び上がつたり、魔法を放とうとしたらいきなり近くによつて来たりしてなかなか倒せなかつた・・・

「まあ最後にはキレイでメルトストーンで焼きぬくしてやつたがな・・・

・

あの時はなぜか完璧に制御することができて、狙いを誤らずにビー

の真下から溶岩が噴出した。

「しかし魔法を使う時にいちいちプラズマソードを消さなければいけないのは面倒だな・・・これも要練習だな」

ビーを倒すときにつ近くに飛んできてもすぐに斬れるようにプラズマソードを展開したまま魔法を放とうとしたんだが・・・

「まさか暴発するとは・・・」

結果はどうやら魔法の制御も狂つて暴発。おかげでプラズマソードを握っていた方の手を少し火傷してしまった。

「まあとっさに制御を離して手から離したからその程度ですんだんだろうけどな・・・火傷自体ウインドヒールで治つたし」

まあ修練あるのみだな。

「うしーんじゃあはぎ取りも終わつたし次は採取に行くか!」

採取クエストで取つてくるように依頼されたのは、花見草が5つと、カジキノコ10個だ。

花見草はあらゆる花の近くに生える草で、生えているところの近くにある植物の育成を促進し、

はやく育たせる効果を持つそ�で、そのため花を栽培している人にとっては価値のある植物らしい。

カジキノコは食用のキノコで、じいたけのようなキノコだそつだ。

どちらも森のなかで採取できるそ�で、危なくて森までいけない人がよくハンターに頼むらしき。

「」の近くで森つづーと・・・あそこか

俺は近くにあつた森に向かつて歩みを進めた。

・・・

「へえ・・・意外とたくさん生えてるもんなんだな・・・」

森の中には植物がたくさん生えていて、その中には田畠の花見草とカジキノコもあつた。

「1・2・3・4・5・・・」

俺は布の中に入り、早々に「」を離れた。

「なんかでそんなんだよな」・・・妙な気配する・・・

「わざわざうまい感じがする・・・

「・・・（フルルルッ）ま、まさか、大丈夫だろ」

結構奥まで来てしまったので俺は急いで元来た道を引き返した・・・

あれから俺はとて元へ出でつけでもなく街にたどり着くことができた。

・・・

「んー・・・なんだつたんだろうなさつきの気配・・・」

確かに何かの気配がしたんだがな・・・

「うと、着いたか・・・考えて何かわかるわけでもないしどりあえず入るか」

そうこうして俺はギルドの建物に入つて行つた。

「すいません。クロストの報告に来ました」

話しかけたのはセラモビのセラモビのお姉さんだ。

「もう来たんですかー? まさか全部終わらせたんですかー! ?」

「はい」

「・・・どんなペースでこなしたんですか。まだ受諾してから2時間たつてませんよ・・・」

「あれ? まだそれだけしか経つませんか?」

「はい」

あー・・・しまったな・・・腕時計で時間確認すりやよかつた。

「まあ思つたよりも結構早く終わつたんで。案外簡単でしたし」

「せうですか・・・やはりあれぐらいの能力になるとそんな感じになるんですね・・・」

あんまし田立ちたくないのになにしてんだ俺・・・まあいいか。

「それでクエストの結果なんですが・・・」

「あ、はい、では討伐した証拠品と採取品を出してください」

「はい」

布から集めた物を出す。

「・・・はい、すべてそろつていました。魔結晶はいざりますか?」

「はい、全部で6つです」

今回は討伐したモンスターが多かつたせいか結構取れた。

「えっと・・・全部小魔結晶ですね。ではお預かりします」

お姉さんに魔結晶を預ける。

「ではこれがクエストの報酬と魔結晶の回収代金を合わせた分です。全部で1400ニルになります。

また、今回のクエスト成功によりGランクでのクエスト達成数が10になりましたのでFランクへと昇格します」

「あれ? もうですか?」

「普通は1日1回、多くても2つくらいしかクエストは達成できないので一週間以上はかかるのですが・・・あなたの場合は1日こ5つというすごい数ですかね・・・」

・・・マジか、結構簡単に終わるからつづけようかな  
るのかと思つてたぜ・・・

「まあそういうとあなたはエランクへ昇格です。おめでとうござ  
れこまゆ」

「・・・なんかげやつですね」

「あなたに付きましたと驚く事が多いので適当にしなさい」とい  
ました

・・・それでいいのかギルド職員?

「昇格したことでギルドカードを変更があるのでギルドカードを渡  
してください」

「はい」

「お預かりしました。では変更には少々お時間がかかりますのでそ  
ちらの席でお待ちください」

「わかりました」

「では失礼します」

そういうとお姉さんはギルドの奥へはいっていぐ。

「・・・待つか」

俺は言われた通りに席に座つて待つこととした。

・・・

じまいへ待つと、ギルドの中に騒がしい一団が入ってきた。

「・・・めはははははははー！ 今日も大漁だ！」

「そりつすね兄貴、こいつは報酬に期待できますねー。」

「そ、そりなんだな

・・・なんつーもづっぽい奴らだ。

「お待たせしました」

カウンターからお姉さんが近寄つてきた。

「いじらお預かりしていたカードになります。ご確認ください」

そう言つて渡されたカードを見ると、GだったランクのところがFに変わつていた。

「ありがとうござります・・・あいつらのこと知つてますか？」

「あいつら・・・・・・あ、マスカー兄弟のことですか？ まさか知らないんですか？」

「ええ、何分最近この近くに来たもので・・・」

「そりですか・・・の人たちには関わらない方がいいですよ」

「関わらない方がいい・・・？」

「ええ、あの人たちは自分たちのハンター「ランクが高いからついつも威張り散らして・・・色々あぐじごとをしてくるといつ噂もありますし・・・」

そのマスカー兄弟とやらは、ギルドに入ってきた後酒を飲んで笑い声をあげていた。

「ああいう風に昼から酒を飲んでうるさくするのでギルドとしても困っているのですが・・・実力は確かに受けたクエストは確実に達成するので中々文句も言いつらいんですよ・・・」

「ふーん・・・」

マスカー兄弟の話が聞こえてくる。

「しつかしもしないよなああの女!」

「そりすね兄貴!」

「そ、そりなんだな」

「けけつ、おもしろかったなあ、あいつが夜になるたんびに泣きわめく様子はよ!」

「ですね兄貴!」

「そ、そりなんだな」

酒が入ってきて興奮してきたのかますます声が大きくなつてくる。

「しかし最近はつまんなくなつちまつたもんだよなあ・・・ほとんど泣かなくなつちまつたし」

「そりすねえ・・・全然おもろくないつすねえ・・・」

「そ、そりなんだな」

「といづか兄貴、どうやつてあいつをおとしめたんで?」

「ん? 聞きたいか?」

「はいー。」

「そーかそーか! 確か・・・あれば半年前のことだつたな」

半年前・・・? 確かリタの親が死んだのがそれくらいだつたな。

「あれくらいの時に少し大きなクエストに失敗しちまつてなあ・・・  
その時にな、ある女の親が死んだつて話を聞いてな、こいつは憂さ  
晴らしのいい機会だと思つたんだよ」

「俺はその話を聞いてからそいつの交友関係をしらべてなあ。そいつの友人と思わしき奴を脅してやつたんだ」

「楽しかつたぜ? 俺を恐れた奴が次々とそいつの周りから離れて行くのを見るのは!」

「そいつの近くに住んでるやつは俺が関わってるやつこそヘタに触れて俺の怒りをかつたらと思つて近づかない」

「結果、そいつは一人ぼっちになつたわけだ！」

「へえ、流石兄貴つすねーずる賢也では天下一品ー。」

「頭を使つたといえ頭を」

「それで兄貴がいじめたそいつの名前は？」

「なんだ？ 気になるのかお前？」

「へえ、せつかくなんで聞いてみたいつす」

「ふうん・・・いいだらう教えてやるよ」

「ありがたいつす！」

「確かそいつの名前は・・・」

「リタ、だつたと思づ?」

「その声を聞いた瞬間、

「おい」

「あん？ 何だおま、ぐああつー。？」

「あ、兄貴！？」

俺はそいつを思いつつきつ殴り倒した。

「！」この野郎、なにこいやがる！

「お前なんかのせいであの子は苦しんだのか・・・」

「ああん！？何言つてやがるお前！？」

「お前なんかのせいであの子が苦しんだのかつて言つてんだけよ！？」

「あ、兄貴、俺こいつ知つてますよ！確か昨日二コタの宿に泊まつたやつだ！」

「あん？・・・はーお前あの女に惚れたクチか？だから怒つてんのか？」

「ちづえよ・・・さづな、お前なんかがリタを苦しめたつて言つただけでキレる理由には充分なんだよ！？」

「こいつがあの子を苦しめてる・・・さづな、俺の口は勝手に言葉を発していた。

「悲しんでたんだよ！悲しんでたんだよ！あいつは！親が死んで一人ぼっちで！誰も頼るやつがいなくて、それでも一人で頑張つて・・・なのになんであいつをいじめられる！？」

「はあ！？あいつの事なんぞ知るか！要は俺が楽しいかどうかなんだよ！」

「こんな・・・こんな奴の身勝手であいつは苦しんでたのか！・

「・・・もひいい、お前は潰す！」

「ふん、上等だ！表に出ろ！俺を殴つたことを後悔させてやる！」

「それはこちらのセリフだ・・・リタを泣かした事、後悔させてやる！・」

「はん！せいいぜい頑張ることだな・・・おい、そこをじきやがれ！」

そいつの声で他の人が道をあける。そいつは先にギルドから出て行った。

「あ、あなた、どういうつもりですか！？マスカー兄弟に喧嘩を売るなんて・・・！あなた死にますよ！？」

ギルドのお姉さんが血相を変えて俺の前に立つ。

「マスカー兄弟の長男、ヴェルガのハンターランクはB！あなたのハンターランクはF！どう考へても無理です！」

それを聞いた周りの人気がどよめき始める。

「すぐにやめるべきです！頭を下げて謝つてでも・・・！確かにさつき言つていたことは許される事ではありませんけど、所詮は他人の事じゃないですか！それで命を捨てるなんて馬鹿のすることです

「…………？」

「…………たしかに無謀かもしれん。ひょっとしたら死ぬかもしれん。あなたが言つた通り馬鹿なことかもしれん」

「でしたら…………」「けどなー。」「…………」

「けどな…………約束したんだよ、リタを手伝つてやるつて。幸せな日々を取り戻すのを手伝つてやるつて……」「…………

「あいつは泣いていて俺はそれをなんとかしてやりたいと思つた！」「だから俺は行く。リタのためじゃない。これは俺がしたいからするんだ！」

「リタのため、なんて高尚なことは言えない。結局はただ俺がなんかしたいっていうわがままなんだから。」

「あいつを倒して、ぜりてえでリタには関わらないように警てひまはるー…そつすつやもうリタは逃げられることもないし、一人ぼっちで過ごすこともないー悲しむ事もないー」

「行かせてもらひませ

俺が横を通り過ぎても、お姉さんは止めることはなかつた。

「かなづ・・・かなづ勝つてくださいね」

後ろからそんな声が聞こえてきた。

「ああ・・・むちむんだ」

そう言つて俺は外の広場へと出て行つた。

「・・・せつてえ瀆す」

決意を固めて・・・

## 第十話 怒りと決意（後書き）

はい、ということでお話の第十話 怒りと決意でした。いやー主人公よ、燃えてるねえー

黒「俺は弱い者いじめが大嫌いだからな・・・あいつは潰す」

おお、こわいこわい・・・この主人公は怒らせると怖いですよー？

というわけで蓮が怒っているので私だけで進めます。

今回蓮がこんなに怒っているのはリタが泣いていたのは他人の楽しみのせいだとわかったからです。

もしこれがリタにも原因があるならばこんなには怒りませんでしたが、

今回は全くリタに非がなく、他人のうざばらしに巻き込まれたとわかつたのでキしました。

蓮は理不尽というものが大嫌いで、誰かが理不尽に巻き込まれていると知ると、その人を苦しめている者に対してものすこい怒りを向ける、という設定も実はあつたり・・・

黒「・・・ふふふふ、どう料理してやるうかなあの野郎」

・・・さて、黒が怖くなってきたのでここで終わりたいと思います。皆様、相も変わらない駄文で展開も急な話でしたが、読んでいただいてありがとうございます。

それではみなさん、また今度～

## 第十一話 Bランクの実力、Fランクの底力

広場ではヴェルガとかいう野郎が布を巻いた斧を持って待っていた。

「遅かつたじゃねえか・・・てっきり逃げたのかと思つたぜ?」

「は、誰がお前から逃げるつてんだよ」

「てめえ・・・言つじゃねえか。聞こえてたぜ、お前、ハンターランクFなんだろ?俺のハンターランクはB、かなうわけがねえじゃねえか」

「それがどうした?」

「はーお前知らねえのか?ランクは絶対的な力の差を示す!FがどうあがいたつてBにはかなわねえんだよ!」

「・・・力の差?FがどうあがいたつてBにはかなわねえ?・・・はつ、馬鹿げてるな」

「・・・いい度胸じゃねえか。てめえが俺に土下座して謝るんならまあ一発殴るだけで勘弁してやろうと思つたが・・・やめだ。てめえをいたぶつて、この俺にたてついたことを後悔させてやる・・・!」

「ごたくはいいんだよ・・・そつだな、いい事を教えてやる。俺のランクはFだがな、上がったのは今日だ」

「・・・ははははは、ははははははは！お前バカじやねえの？昨日までGだったんならなおさら無理だろ？が！」

「ふん・・・じゃあ見せてやるよ。お前が馬鹿にする、Eランクの強さってやつをな」

リタを泣かした事、後悔させる・・・

「やつてみせりやあ！…！」

そういうてヴェルガは俺の方へ突っ込んでくる。

「この斧で叩き潰した気に入らない奴は49人！お前で50人目だ！」

「・・・じゃあ宣言しどいてやるよ、その叩き潰される50人目はお前だ！」

「ははけえええっ！」

ヴェルガが俺に向かって斧を振り下ろす。なるほど、確かに叩きだけの事はある。斧を振り下ろすスピードはなかなか速い。・・・だが、

「ふつー！」

見切るなどたやすい！

「てめえ・・・よくかわしたじやねえか。

じゃあこいつはビデウだあ！サクセッションスラッシュ！」

ヴェルガが斧を連續で振り回す。

「ふつ、はつ、せやつ！」

俺はそれを最小限の見切りでかわし続ける・・・！」

「この・・・ちょこまかと、動くんじゃねえー！」

ヴェルガが大きく斧を振りかぶる。

「ひいだ・・・! プラズマランサー!」

俺は今日のクエストの合間に練習した無詠唱でのプラズマランサーを一発放つ。

練習の成果でとらあえず一発だけなら無詠唱で放てるようになった。

「ぐああつー?」

魔法は狙いたがわずヴェルガの体に命中する。魔法が命中したことによる痺れによりヴェルガは大きな隙をさらしていた。

「いぐぞ・・・不動黒羽流・・・」

「ぐつ、ぐあつ、ぐああつー!」

その間にプラズマソードを作り出し、ヴェルガを唐竹、左斬上、右薙と連続で斬り裂く。

そしてヴェルガに向かって腰溜めに構えて、

「四爪連斬！」

「ぐああああああつ！」

左薙に切り抜ける・・・・

「二」、この野郎、武器も持たないどうするかと思えば魔道士かよ！」

「ちつ、あまり効いていないか・・・・

プラズマランサーと合わせての五連撃だったがヴェルガはピンピンしていた。

「はつ！俺がBランクにいる理由の内の一つが生まれ持ったこの打たれ強さと怪力だ！たしかに雷属性の魔法を喰らえばちと痺れるが・・・この程度の威力ならどれだけくらつても大したダメージにはなりやしねえ！」

「・・・筋肉馬鹿つてやつか」

「あんだとお！？」

「打たれ強い、怪力・・・やつぱ筋肉馬鹿だろ」

「二」の野郎・・・よほど死にたいようだな・・・ちつ、敵の挑発に乗るんじゃねえ俺

などと軽口を叩いてみるが結構まずい。プラズマソードが使えない

となるといつも俺の攻撃手段が少なくなる。プラズマランサー や フリーズランサー ジャ たいしたダメージにならない。かといって メルトストーンとかの高威力の魔法は詠唱している暇がない……

「仮に詠唱する時間があったとしても」  
「じや周囲を巻き込む……」

俺たちが戦っているのは街のど真ん中にある広場。とうぜん周囲は人々が取り囲んでおり、へタな魔法はその人たちを巻き込むことになる。

「やはり近接戦闘でけりをつけるしかないか」

結論が出たといひでヴェルガが落ち着いて来た。

「ふー・・・しかし思つたよりもやるじやねえかお前。たいしたも のだよ、Fクラスなんかが俺を傷つけられるたあ思つてなかつたぜ」

「ふん・・・お前になんかに褒められてもうれしくないね」

「まあそういうなよ、お礼にいいものを見せてやるよ

」

そういふとヴェルガは、斧に巻かれていた布を外していく。

「正直お前なんかに使つようなもんでもねえが・・・まあ偶にはいいだろ」

そして、ヴェルガは布を完全に外した斧を振り下ろした。  
布が外された斧は真っ黒で、刀身の中央には緑の宝玉が取りつけられていた。

「これが俺がBランクまで上がれたもつ一つの理由……相棒、「ガトーノヴァ」だ」

斧からは奇妙なオーラが漂つていて見えて、邪悪な気配がした。

「なんだ……そいつは？」

「！」こつは魔装具だ。それもBランクの貴重な物だぜ？」

「魔装具……？」

「呆れた……魔装具も知らねえのかよ」

「ふん、お前にまだつでもいいだろ」

「まあ確かにそうだな……つと、そこまで教える義理は俺にはねえぜ？他の誰かに教えてもらひな……但し、この戦いに生き残ればの話だがなあ！」

「つー」

来る！

「さつきまでは油断していたが……こつからは本気だ！お前を殺すまで俺は止まらねえ、行くぞおー！」

「なつー！？」

わつあまでとは速さのケタが違う！？

「喰らえ！」

「くつ・・・！」

なんとか初撃はギリギリかわせた・・・  
ヴェルガが振り下ろした斧は大地に小さな亀裂を走らせていた

「なんつー馬鹿力だ・・・さつきまでとは全然違つぞ・・・！」

あんなの喰らつたらマジで死ねるぞ・・・！

「よくかわしたな・・・だが今度は外さねえよー喰らえやあー！」

「やばつー！」

まづい、反応が遅れた・・・これはかわせん・・・！

「くつ、（シールド）ー！」

無詠唱で簡易の防御壁を張る。

「無駄だ！死ねえええええつー！」

「ぐはあつー！」

だが斧の一撃は障壁を紙の如く破り、俺その一撃をもろに食いつて  
ふつ飛ばされた。

「（）ふつー・やべえな・・・」

今の一撃で内臓が傷ついたのか口から血が出てくる。

「・・・癒しの風よ 傷つきし者を包みて 爭いの傷を消せん  
ワインドヒール・・・」

応急処置にしかならないが自分の体に治癒魔法を使う。

「あん？・・・今のはイツたと思つたんだがまだ生きてやがるのか・  
・」

「は・・・俺はあんなもんじゃ死なねえよ・・・」

とはいひものの今のは効いた・・・治癒魔法で外見の傷は消えてい  
るが、斧が当たった衝撃で体は若干言つこときかねえし、腹はズキ  
ズキ痛むし・・・

「まだ無駄口叩く余裕があるのか？お前、じゃあ今度は・・・全力  
でブツ叩いてやるよ！」

そういうながらさつきよつも速いスピードで俺に突進していく、ガ  
ルガ。

「・・・我が円卓は守護の証・・・」

集中しろ・・・わつきは突破されたが、今度はそつはいかねえ・・・  
！」

「されば私は彼の者を守る盾とならん――ラウンドシールドおー」

俺の目の前に円形の盾が展開される。

それは先ほどよりも存在が確かで、強く輝いていた。

「・・・馬鹿な！ありえねえ！？俺の一撃を止めるだと！？」

俺が展開した盾とヴエルガが振り下ろした斧はぶつかり合い、激しい風を巻き起こしていた。

「」の野郎・・・調子乗つてんじやねえぞおー。」

斧の力がさらに強くなる・・・それと呼応するかのように斧の宝玉が怪しく輝いていた。

「…………負けて…………たまるかつついのー」

負けじと盾に魔力を注ぎ込み、さらにその存在を強化する。

卷之二

互いに譲らじと激しくしのぎを削る。

そして

「ぐつ、」の野郎・・・俺の一撃を耐えやがった・・・」

しのぞあこの軍配は俺に上がった。

「はあ・・・はあ・・・・ギリギリだつた」

危なかつた・・・・もう少し力を入れられてたら先に魔法の構成が限界を迎えてた・・・・！

「だがこれでお前の攻撃は止まつた・・・・今度はこちらの番だ・・・・  
借り、返させてもらうぜ！」

このままあいつの攻撃に付き合つてたら先に俺の体がダメになる・・・  
・その前に決着をつける！

「いくぞつ、雷牙！」

ヴェルガに一気に近づき、プラズマソードこさりに雷を剣に纏わせて一閃する。

「ぐうつ・・・・・そんなもの、効かねえつて言つてんだろ？が！」

確かにヴェルガは対してダメージを受けた様子は無かつた。だが・・・

「なら連撃ならどうだ？」

「何・・・・？」

「俺はもうすでにお前のふとこりにいる・・・・お前にできるのはただ耐える事だけだ！」

単発なら対して効かなくても、それが積み重なれば大きなものにな

る。

そして、それが出来る技を、今の俺は持つている・・・！

「覚悟しろよ・・・まあはお前に付けられた傷の分を返す・・・」

雷牙で纏わせた雷に加え、さらにギリギリまで魔力を剣に注ぎ込んだ。その結果、黄色く光っていたプラズマソードは青白く光り、バチバチと音を立てて雷を発している。

「プラズマソード・フルブースト・・・！」

いくぞ・・・

「・・・不動黒羽流・・・奥義！」

「――」

「ぐはっ――」

「――」

「がはあっ――」

まずはヴェルガの体をプラズマソードで斬り裂き、そして蹴つて前にふつ飛ばす。ふつ飛ばした時に

「二――」

「ぐふっ・・・」

「四一」

「四二」

「五〇一」

「ぐはあつー」

ふつ飛ばしたヴェルガに追いつき、左斬上、右斬上、逆風と三連続で斬り上げる。

「いぐれ・・・」からは・・・お前に悲しめられたリタの分だ・・・

「なんだと・・・」

「言つただろう・・・借りは返すとー・リタの分も含めて返させても  
らひせー! 六、七、八! ！」

「ぐつ、ぐはつ、がはあつー」

逆風で斬り上げた勢いのまま上へと飛び、斬空刃を三連続で飛ばす。

「んで・・・九!」

「ぐああああつー?」

そのまま重力のままに落ち、ヴェルガの頭に唐竹を喰らわす。  
そして着地した勢いのままその場で回転し、

「じじめだ・・・雷神連牙、十連斬！」

「があああああああああああつー」

振り向かざまに左難で切り裂いた・・・

「どうだ・・・？」

夢の中で新しく覚えた奥義だ・・・今の俺のではこの技が一番攻撃の回数が多い。

これが効かなければもう俺に打つ手はあと一つしかないんだがな・・・

「ぐはっ・・・くそっ、やりやがったな・・・殺してやる・・・殺してやらあああああ！」

「・・・うわー、あんだけ斬つてまだ元気だこいつ。どんだけ頑丈なんだよ・・・」

とはいえ・・・

「くそつ、なんでだ、なんで体が動かねえんだ！」

「さすがにそれだけ体に電撃が走れば動かんだらつ

プラズマソード・フルブースト。大層な名前だが単にプラズマソードに魔力を限界まで注ぎ込んで強化することで、その威力を爆発的に上げる力任せの強化・・・まだ構想だけで試した事は無かつたが、状況を開けるにはこれを使うしかないと思い使用した。

フルブースト状態になると短時間しか制御できず、ひとつ技の間ぐらいしか使用することができないが。この状態の剣には並の人間なら一撃でも喰らえば昏倒するほどの量の電流が流れている。

今回はそれを十回も喰らわせたんだ……氣絶しないのでも不思議なくらいだ。

「さて……時間をあいて麻痺が取れても厄介だ。今のうちにけりをつけよ。」

そう言つて俺は、ヴェルガが落としていた斧を手に持つて重!?これを片手で持ちあげるつてどんな馬鹿力だよ……

「てめえ!俺の斧にさわんじゃねえ!」

「返してほしかつたらもうリタとその周りの人に近づかないって誓いな」

「誰がてめえなんかに」「ズガアアアアンッ!」……死にたいか?」

「イイー?はい、誓います!」

斧を地面に振り下ろして亀裂を作ると、ヴェルガは簡単に誓つてくれた。

「誓つたな……んじゃあもうリタに関わんなよ……関わつたら俺が潰す

「はい、もう関わりません!……だ、だから解放してくれませんか?」

「ふん・・・・」

斧を持つて、ヴェルガに近づいて行く。

「て、てめえ・・・まさか・・・や、やめひ、やめてくれ・・・」

「殺せねーから安心しろ・・・とにかく殺すなら誓わせる意味がねえだらうが・・・」

「そ、そうですか」

「だがな・・・」

「ひつ・・?」

「てめえはリタを泣かしたんだ・・・当然しつ返しを食いつ覚悟はできてんだよなあああー」

「ひいいいいーーー?」

「食らえや・・・自分の斧の一撃とやらをあー」

「あやつー」

斧の柄の部分で頭を殴ると、ヴェルガは気絶して倒れてしまった。

「そ、そんな、兄貴が、兄貴がやられなんて・・・」

「た、たいへんなんだな」

見物人たちの輪の中にいたヴェルガの取り巻きがわめいている。

「・・・お前らもこうなるか？」

「ひい！？け、結構つす！」

「お、オイラもなんだな！」

「じゃあさつあとどびつかへ行け・・・」

「「は、はい、失礼しました（たんだな）——」」

取り巻きたちがヴェルガを持ってどつかへ行つてしまつ。ヴェルガ達がいなくなつたことでにわかに見物人たちがざわざわし始めた。

「・・・すげえ、あの兄ちゃんヴェルガに勝つちまた！」

「見たか！？あの、ヴェルガの怯えきつた顔をよお！」

「ヴェルガ達が逃げ帰るときどんにすつきつした事か！」

「あのヴェルガを倒したお兄さん誰だろひー！」

「あー、また面倒なことになりそつだ。」

「でも、ま・・・今はどうでもいいや・・・おい！周りで見ている人達の中にリタの友達だった人はいるか！？」

そう俺が叫ぶと、群衆の中から10名ほどの少年少女が不安そうに

出てきた。

「な、何ですか？」

「ああ、そんな怖がらなくていい。少し頼みたい事があるだけだから」

そういうと少年たちの顔から少し不安の色が消しおった。

「えっとさ、君たち元々はリタと仲良くしてた子たちかい？」

「は、はい、そうです」

少女が答えた。

「ヴェルガ達に脅されてリタから離れて行つたんだよな？」

「はい・・・一人ずつ呼び出されて、「リタとかいう小娘に近づくな。もし近づいたら・・・大変なことになるかもしけねえぜ・・・？」と言われて・・・」

・・・下種だが小悪党みたいな言い方だな。

「わ、私たち、本当はリタの親が死んでから、慰めてあげようと思つて一緒にいたかったんです！で、でもヴェルガ達に脅されて仕方なく・・・」

「ああ、別に疑つてるわけじゃないからいいよ」

「そ、ですか・・・それで、僕たちに一体何を頼むつもりです

か?」

「ああ、君たちにとっては簡単なことだよ。昔みたいにリタと一緒に遊んであげてほしい」

「この子たちがリタを嫌がっているわけじゃないのなら大丈夫だ・・・

「リタは今一人ぼっちです」「寂しがっている。だから君たちがリタといてくれれば寂しさも薄れると思つんだ。だからどうか、頼む」

そういうて俺が頭を下げる、少年たちは顔を見合させて頷きあつた。

「顔をあげてください・・・もともと僕たちはリタが寂しがつてたのに気が付いていたんです。でも自分の身惜しさにリタのために何もできなかつた・・・だけど、あなたがリタの寂しさに気がついて、その原因だつたヴェルガを倒してくれた。なら僕たちがリタと仲良くしない理由はありません。な、皆!」

「「「うん(ああ)(ええ)・・・」」

「だから大丈夫です。・・・リタにはひどい事をしました。許されなくとも仕方がないと思つています。ですが、できるならばもう一度リタと仲良くなつて一緒にいたいと思つています」

「そつか・・・」

おそらくリタはこの子たちを許すだらう。そもそもこの子たちに罪は無いのだから。

だがそれを俺が言つ」とはない。それはリタ自身が言つべき」とだ

さうから。

「んじゃ君たちを集めたのはそれだけだよ。・・・俺が言つべきことではないかもしないけど、リタと仲良くなれることを願つてい るよ」

「いえ、あなたのおかげでリタに謝り、そして仲良くなれるチャンスができました。あなたには感謝しています。・・・ありがとうございます」

「ありがとう」「わざわざ」「」

「いや、これは俺がしたかつたからやつただけだよ。君たちが感謝する事はない」

「そんな・・・」

「俺に構うよりも早くリタのところに行つてやつてくれないか？寂しくしてるだらうし」

「・・・はい、わかりました」

「ん、んじゃリタの」と頼むよ、それでは」

「はい」

少年たちは広場からリタの宿の方向へと走つて行つた。

「せん・・・あと俺がやる」かじとせんとひ

俺はこの広場にいるひと全員に聞こえるよつた息を吸つた。

「リタの宿、隠れた名店、Pleasant spaceにぜひご来店を！従業員はたつたの一人ですがとてもかわいい子で安い宿代でその事を感じさせないおいしい料理が食べられますよ！建物が小さくてあまり多くの人は泊まれないので泊まろうと思った人はお早めに！」予約を…ぜひぜひ来てください…」

そつ俺が言つと、群衆の中で、

「へえ、そんな店があるのか」

「かわいい子つてどんな子だろーー！」

「おいしい料理か・・・興味あるな」

といつた声が聞こえてきた。

「・・・新しい門出の日に俺からのプレゼントだぜリタ」

さて、正直恥ずかしいし大分目立つてきたのどこかへ行くとしよう。・・・いいかげん腹が痛いし。

「リタの宿はまあ無理だろうから・・・街の外でも行つて日向ぼっこでもするか」

俺はそつと、群衆の中を駆け抜けると、街の門への道を走つて行つた。

空には青い空が広がつていて、眩しい太陽が輝いていた。



## 第十一話 Bランクの実力、Eランクの底力（後書き）

はい、ところへいとで第十一話、Bランクの実力、Eランクの底力でした。

いやー長かったー。

黒「ほんと、だらだらと書きついでたな」

いやー、色々書くこと考えてたんだけど書いていたら重くなっちゃって……

黒「結局につものよひと想についたことを書いていたり重くなつたと」

はい、そのとおりです……

黒「馬鹿か？」

ぐつぐつ……まあここや。

黒「いいのかよ……」

いいんだよーそして、これでリタについての話は大体おしまいです。あとはこの話の後日談になります。

黒「つか最後最終回つまこけどいいのか？」

これ以外に終わり方が思いつかなかつた……

黒「……やうか」

「これまでは説明が多かつたりしてだらだらした話でしたが、リタの話が終わつたらこよいよ主人公の本格的な異世界での暮らしを書いて行きたいと思います。」

黒「やつとか……てこいつが土台づくりがなげーんだよ」

いやだつてさ、異世界の説明とかスタート地点を作るとかさ、そういう設定的な事じとテキターにやると後が辛いじゃん？」

黒「ストーリーの方にもその意氣で取り組まんかい！」

・・・がんばる。

黒「おつ

では長くなつたのでここで終わります。次回は多分後日談と第一章的なものの始まりな感じな話になると思います。

黒「……次回予告なんかして大丈夫なのか？」

まあ多分大丈夫だろ、予告詐欺になるかもしれんけど・・・

黒「駄目だらー。」

まあ頑張るさ。では読者のみなさん、ここまで見ていてだいてありがとうございました！

黒「また今度ー！」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2446ba/>

---

異世界に飛ばされたけど案外なんとかなるもんだ...

2012年1月10日22時17分発行